
戦人の迷宮探索（改訂版）

乙黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦人の迷宮探索（改訂版）

【Zコード】

Z0765Y

【作者名】

乙黒

【あらすじ】

世界発の仮想現実の技術が使われたゲーム、“ダンジョン・セルボニス”がついに発売された。世界中のゲーマー達が待望したゲームをプレイし、ログアウトすると一転。地獄の迷宮探索が始まった。主人公である青年は、この世界独特の強さである レベルやスキルそれ等が最低ランクだった。ゆえに、この世界の元の住人や、新しく現れたゲームプレイヤーから嘗められる日々が続く。やがて大きな渦に巻き込まれた彼は、善につくのか、悪につくのか、その大きな選択を強いられるのだった。

この作品は、戦人の迷宮探索（仮題）の改訂版です。前回のはあまりに稚拙な作品だったので、思い切って書き直すことにしました。
読者様には多大な迷惑をおかけしますが、今後はこちらの作品のご応援をお願いします。

第零話 プロローグ（前書き）

まだ序盤ですが、できるだけ早く前まで追いつきたいと思つてありますので、これからも応援お願いします。

第零話 プロローグ

太陽の光が閉ざされた深い闇の中で、壁に生えている白い花だけが明かりをくれる通路があった。天井は高く、右を見ても左を見ても壁。幅は狭く、幅は一メートル程。

そんな通路はただ長く、後も先も闇だけが広がっていた。

ここは、迷宮と呼ばれる場所だった。秘宝が、財宝が、金銀が、数多く眠り、荒稼ぎしたい者にはとつておきの場所である。だが、そんなメリットばかりの迷宮だが、そこには危険もある。罠や、怪物が潜んでおり、時には命を失うこともあるのだ。

だが、それが苦とせず、迷宮を突き進むのが、“冒険者”という生業だった。

命を糧に金を求める、犠牲の果てに栄光がある。

冒険者とは、そんな職業であった。

そんな場所にただ一人 灰色の青年は立っていた。

彼は、変わった青年であった。
麻製の服の上を灰色のマントをで包み、顔は愉悦で染まつていて、ただ歩みを進めるだけ。

云うならば、一般人の“格好”だった。これで町に出ても、なんらおかしくないだろう。間違つても、命を糧に金を求める 冒険者の格好ではない。

そんなここに不釣合いな彼が、ここに居たのは理由があった。
それは生きるためにだ。

急に独りになつた彼は、現在金目の物を持っていなかつた。生き

るためには金が必要だ。その金を稼ぐため、彼は冒険者になつたのである。

今の彼は、そんな職業に就いて早一週間経っていた。

冒険者という職業に慣れない最初は戸惑いもあつたが、今は“ある理由”からこの職業に悦びさえ覚えていたのである。

それは、彼が狭い通路をしばらくの間進んだ時のことであった。そこでは目に強い光が現れ、光の中から音が聞こえたのだ。

「くつそお！ どうしてこんな低階級にこんな高レベル怪物モンスターがいるんだ！？」

それは、不運を嘆く、哀れな者の声であつた。

悲痛な声が聞こえる場所は、通路の終わりだ。だが、その続きは壁ではなく、大輪の白い花が天井を多くつくすほどある広い空間がある。

そこは、剣呑な空気であつた。

中世の鎧を着た三人の“冒険者”と、人より一回りも大きい金属で覆われた一足歩行の人によく似た体の構造を持つた怪物モンスターがいて、お互いがお互いを目で牽制しあつていた。

敵を睨みながらも、弱弱しく立つてゐる冒険者の武器は、それぞれ槍と棍棒と弓だ。

この三人は既にこの戦闘の数分前、力量ヘルが22の敵を十体倒して

おり、本来なら宿に帰つて休みたいところだった。ゆえに体調が万全ではなく、呼吸も深呼吸である。

彼等とは反対に、堂々と立っていた怪物の姿は 異様だつた。
防具のような纏つている金属が赤色。体の前に逆さに置いた太く、
分厚い大剣でさえも赤色である。

その姿は、血を喰らつて生れる
あたしぐ“物の怪”だった。

「異常なんて……！」

二人の“冒険者”内の、誰かが口にす。
異常とは、本来存在する怪物の突然変異で、それは通常の物より
強い。

今ままでは異常に勝てない、それが三人の冒険者の心境だった。
い。

それは彼らが、力量も技も足りなかつたからだ。
力量とはその者の強さを数字で表し、通常は高ければ高いほど強
い。

そんな力量で異常を表すと40程。

逆に三人を力量で表すと、彼らはそれぞれ20位しかなかつた。
それは、冒険者である彼らが、生贊という代償を用意しても、異常十人集まつてやつと一人生き残れる確率だつた。

ところで、技とは武器の熟練度を上げることによって、それを一定以上貯めるとそれに適した技が開放され、その者の体力に応じて何回か使えるようになる一定の現象のことだ。

その現象には色々あり、例えば剣から衝撃波を飛ばせたり、練習

もしてないのに槍を連續で突けるようになる。など、様々な種類があつた。

「諦めるな！ 諦めなければ勝機は必ずあるはずだ……」

また、三人の内の誰かが言った。

無駄だろう、と灰色の彼は思つ。

何故なら彼らが向かう出口は、異常が塞い（イレギュラー）でおり、自分がいる方に逃げても外には出られず、むしろ迷宮の奥へと続く道なので、もしかしたら“より”強大な敵がいるかもしれない。

だから、三人は“このまま”の状況では、異常に勝つ以外に、生き残る手段は無いのであつた。

「仕方ねえ、ちょっと英雄になつてくるか」

そんな絶望的な三人の光景を田の当たりにした彼は、わざとくさい台詞を吐きながら一步踏み出した。

彼の歩みの矛先は、異常（イレギュラー）へと真っ直ぐ続く。

相手は難敵にも関わらず、淡々と、まるで家のなかを歩くよつて、彼は足を進めるのであつた。

「き、君、止めとけ」

三人の内の槍を持っていた一人が、彼を止めた。

彼の無謀な挑戦を止めさせようとしたのだ。

何故なら彼が、田ぼしい武器も、田ぼしい防具も持っていないからだ。

だからだろう。その一人は、防具どころか武器すら持っていない彼を、その見かけから弱いと判断したのだ。

「本当に……本当に……死ぬぞーー！」

いや、見かけだけではなかつた。
彼は力量レベルすらも低かつたのだ。それは三人の冒険者よりも、圧倒的に低かつた。

「どけ。邪魔だ」

だが、口角が上がつている彼は、その止めた者の手を乱暴に扱つた。

先程、英雄になる、と大層に言つていった筈なのに、彼に三人を助ける意思是全然無く、むしろ彼には異常イレギュラーと戦いたい気持ちのほうが大きいのである。

どこまでも彼は 獣のような“餓えた”人間だった。

「 さあ、戦やろうぜ」

五メートル先にいる彼の発言で、異常イレギュラーは剣を構えた。両手を突き出し、その太い腕で大剣を支える。

これで事実上、彼の宣戦布告を異常イレギュラーが受け取る形となつた。

ダッ！

そして、先に仕掛けたのは、灰色の彼だ。

上体を前のめりにし、己が出せる最高スピードで、異常イレギュラーとの距離を一気に詰める。

キリキリツ！

敵は彼が近づくのが分かると、独特的の歯車が回る音を出しながら、大剣を驚異的な速さで振り落とした。

彼はそれを、右にかわす。が、完全には敵の大剣はかわせず、皮膚を浅く切った。

だが彼は怪我を氣にもせず、異常の背後に回る。それは大剣をもう一度振らせる暇などないほどのスピードであった。

「まつ、死ねや」

次に灰色の青年は背を駆け上がり、両手で大事そうに、顔らしき部分を持つた。

そして、首を力強く廻す。

瞬間、首元からは瞬間に鈍い音がし、首は顎が上になるように折れる。

そして彼は背から下り、首を限界まで下に引っ張る。

すると、どうだろ？

捻られ、引っ張られたコードは、それも首にある多種多様の色で覆われたコードは、あまりの“力”に耐え切れず、無残にも千切れ。まるでロボットの首が取れたかのように、彼は敵の首を取つたのである。

「えつ……！」

奇想天外な異常の斃し方に、三人は大きく目を見開き、驚愕した。やがて、彼の手首についた時計のような無機質な声が鳴った。

ピコーン、力量^{レベル}が1-1になりました。

第一話　日常

「ほれ、避けんか！」

早朝、静かな山奥にしゃがれた声が響いた。それは眠気を邪魔するのには、最適な殺氣だった声であつた。

だからか、危険を察知した小鳥達が飛び立ち、木々がざわめく。

「うるせえ！ ジジイこそ孫相手に背中を狙つな……！」

次に森に響いたのは、低い青年の声。一いちもドスの効いた“怖い”声だ。

そんな二つの声の出所は、山の中腹にある小さな神社の裏手にある板間の道場だ。

中にいた者は　二人。

どちらも一流と云える武芸者であった。

片方の青年は汗で黒く汚れた道着と白い帯を着ており、背は170後半。腕や足などの体は遠くから見れば細く見えるが、実際に近くで見ると常人の“それ”より太く、細かな傷もついており一般人の腕とはまるで違つっていた。

そんな青年と対峙していたのは、白髪の老人。

青年と同じような道着だったが帯の色だけは黒で、それだけでも強いと錯覚する。そして、その老人の最大の特徴は青年より細い体躯で、筋肉も然程しかない肉体だ。しかし、無駄な贅肉もついてい。まさしく、不必要的肉を全て削ぎ落とした体だった。

そんな風貌の二人は、殴り合っていた手を止め、一旦距離をとつ

た。即座に二人は睨み合い、同時に踏み込む。

青年は拳で、老人は足で、それぞれを狙い、やがて拳と足が激突した。

一般的に手と足では足のほうが三倍強いと云われるが、この二人の威力は同等だった。

若い故の青年の優れた瞬発力が勝ったのか、やはり老いた老人の肉体が負けたのかは分からない。

だが、どんな結果であろうと、威力が同じだった“事”に違はない。

なので、二人はその結果に大した動搖は見せず、すぐに次の行動へと移る。

最初に仕掛けたのは青年だ。

ぶつかつた右手をすぐに引つ込め、右手で老人の胸倉を掴む。老人は蹴りだつた為、次の動きへと移るのは遅れたが、それでも負けてしまいなかつた。

老獴とまで云われる、永い年月をかけた技術のみで青年の胸倉を掴んだ腕を、左で持ち、肘を右手で逆方向に 極める。

「糞がつ！」

しかし、青年もすぐに反撃した。

関節が極められていない逆の一本の指で、咄嗟に老人の目を狙う。

「うわっ！ 危ないのう。いたいけな祖父を殺すつもりか？」

老人はこれに対して急いで両手を離し、後ろに上体を倒す。ようするにスウェーであつた。

「いーや、老人思いの俺が、そんな事するわけないだろ。それより、ジジイも折るつもりだったのか？俺の右腕」

「いーや、孫思いのわしが、そんな虐待のよつたな事するわけないじやん」

似たような答えを返す一人。

青年は口では笑っているが、目が笑つていなかつた。勿論、老人も口では笑つっていたが、目は笑つていない。

「ははっ……」

「ほほっ……」

両者とも分かつていた。

乾いた笑いをしながら、お互いがお互いに本氣だつたのを。しかし、表面上では冗談のよつに振舞つている。

とんだ茶番だ。

本当を知つてゐるのに、あえて知らない振りをする。

だが、そんな偽りは長くは持たない。込み上げる激情は、そう我慢できるものではないのだ。

「死ねやつ！…！」

「くたばれっ！…！」

やがて、似たもの同士の一人の堪忍袋の緒が同時に切れ、またぶつかり合つた。

「はあ……」

「こんな朝が、あの二人には毎日のように訪れていた。メビウスの輪のように、昔から永遠と続いていたのだ。

だからか、この光景を、もう千を超えるほど見たこの光景を、道場の外から見ていた女性がそつと嘆息する。

「氷雨ひさめもお祖父ちゃんも止めなさいっ！…！」

そして、大声で二人を止める。

二人は何度も交わりながら戦いあつたのが、目に見えるほど汗をかいている。これを見た女性は、また洗い物が増えた、と溜息を吐いた。

先程の一瞬は、この二人にとつては、ほんの短い時間なのだつた。彼女の声が耳に届くと、そんな一人も動きを止める。

両者とも相手に対するぎらつく目を押さえ、エプロン姿の彼女に目を向けるのだ。

「ほう、もう朝食か。小僧、命が助かつたな

「そういえば腹が減つたな。ジジイこそ死期が早まらなくてよかつたな

戦いが終わった後の、こんな言い合ひも日常のように行われていた。

そんな祖父と弟には、同族嫌悪の言葉がよく似合つ。

性格も、戦い方も、遺伝子でさえも似ている一人。だから、まるで自分を見ているようで苛立つ。

何故、自分も同じような遺伝子なのに「はならないんだひとつ」と、彼女は不思議に思った。

(そういうわけね。性別が違うからか)

勝手に彼女はそう納得する。

もとより、こんな疑問などどうでもいいこと。なので、適当に理由づけるのであった。

それは、これまたいつもどおりの静かな朝食の風景だった。畳に置かれた長いテーブルに姉弟そろって座り、その向かいに祖父が座る。

それぞれの目の前には焼き魚と味噌汁どじ飯が置かれ、テーブルの真ん中には白菜の漬物が置かれていた。

「姉ちゃん、たしか今日が発売日だよな」

先程戦っていた青年が、味噌汁を啜りながら尋ねる。

今は道着ではなく黒い学ランを着ている彼は、エプロン姿の彼女の弟で、あの老人の孫だ。

名は、南雲氷雨。
なぐもひさめ

高校一年生の彼は、一般的に見れば地味であった。

今は春先なので長袖。だから服の上からでは筋肉は見えなく、細

かい傷痕も見えない。

勉強の成績は平凡的で、理数系が少し苦手な程度。体育は少し得意だが、それも部活に所属している者には負ける。専門職の人間には、いくら彼でも敵わないのだ。

顔つきは目が少々鋭いだけで、ほかに目立つようなことはない。髪は染めてもなく普通の黒色である。

友達は多くもない少なくもない。クラスの皆と喋るが、いつもは4・5人ぐらいのグループにいる。

これまた地味だ。

当然ながら、そんな彼に目立った噂はなく、今後も生まれる予定がなかつた。一つあるとすれば、姉の話題ぐらいだろう。

クラスの女子には、「ああそんな人いた」としか認識されてない。さらにクラスの全員が、彼が山奥に住んでるので祖父から武術を嗜んでいる事など、友達も知らない。

ゆえに学校の皆には、氷雨は一般人としか認識されていなかつた。

「ええ、そうよ。ちゃんと氷雨の分のゲームも、予約しといったから安心していいわよ」

「ふう、良かった。もしも俺の分が無かつたらどうしよう……と思つてたところだな」

お茶を一杯口につけた彼女が氷雨の問いに答える。

彼と彼女が言つているゲームは、本日発売の世界初VRMMORPG、“ダンジョン・セルボニス”だ。

これは実際に体験できる“バーチャルリアリティ”という最新のバーチャル技術を使ったゲームで、“リアル・カモフラージュ”という機械を使うことによってそのゲームに応じた仮想現実へと行け

るのだ。

その画期的なシステムが使われた第一陣のゲームが“ダンジョン・セルボニス”で、彼も彼女も楽しみにしていたのだ。

「それも見てみたいわね」

「……勘弁してくれよ」

優しげに氷雨に微笑む彼女の名は、南雲雪。

少しの乱れもない真っ直ぐな黒髪は長く、肌は真珠やシルクのように白い。目はぱっちりの一重で、セーラー服からは体の細さが伺える。

正座をしながら朝食を食べている彼女は、誰が見ても日本人形のようだ。

学校で勉強の成績がよかつたり、運動が出来たりと、彼女は優等生扱いされていた。さらに美人だが誰とでも分け隔てなく接し、優しいと、校内でも男女問わず人気の高い女性だ。

地味な氷雨の話題がクラスで挙がるとしたら、殆どが彼女の弟だということでもあった。

「にしても、姉ちゃんがゲーオタだつて学校の皆が知つたら、どんな顔をするんだろうな？」

「驚くんじゃないの？」

「なあ、冗談で姉ちゃんがゲーオタつて、言つてもいいか？」

「殺すわよ？」

「だ、だよな……」

雪は氷雨の質問に、箸をぱちんとテーブルに叩きつけて答える。
まさしく雪のような冷たい殺気が、彼女からなだれ出た。
誰もが羨むような完璧さを持つ彼女にも、やはり隠しているところの“秘密”があつたのだ。

それは生粋のゲームオタクだという事。

携帯ゲームからテレビゲーム。それまたネットゲームまで、RPGなら大体手をを出している。ほかにもSTGシューティングゲームやFPSシューティングゲームなど、種類は様々だ。

だが、彼女はそれが回りに知られると、自分の周囲の評判を落とすことによく分かつており、それをひたむきに家族以外には黙つていたのだ。

「ふん、氷雨に一言釘を刺しておくがな。いくら、ばーちゅるりありていーでも、武術の腕はまったく上がらんぞ！」

朝食の途中、ゲームの話題があがる度、祖父は氷雨にことある度にしつかりと言い聞かせていた。

いくら仮想現実でも本当の現実とはまるで違う、ということだ。祖父は薄々だが、氷雨が誰かと戦いたがつてこることに気づいていた。

交通事故によって親を亡くした孫を引き取ると、一人を甘やかしてはいけないと心を鬼にしながら口口が嗜んでいた武術の稽古をつけた。

その方向性を氷雨だけちょっと間違えたな、と思つ。雪は別だ。

彼女はいい姉として、いい女性として、素晴らしい成長した。だが、氷雨は違う。

彼の組み手相手は、幼少の頃から実の姉と祖父だけだった。

故か、氷雨は血に餓えている。

「けつ、だからなんだ。ジジイには関係ないだろ」

食べ終わっていた氷雨は、祖父に悪態付きながら、学校の準備に自分の部屋へと戻った。

「おじいちゃん、じゃあ私も行くね」

「お、おう。氷雨を宜しく頼むな

「うん、分かつてる」

と、彼のすぐ後、雪も部屋へと戻る。朝食の食器は全自动の食器洗い機に入れれば済むので、それは祖父の仕事だ。雪に迷惑をかけないため、祖父が自ら提案したのであった。

そして、その数分後、姉弟の二人は学校へと出かけた。

「はあ……」

そして、一人が学校に向かった後、こうして縁側で神主の格好をしながら、祖父は一人考えに耽つた。

修羅道へと墮ちれば、一度と人へは戻れない。

祖父は知っている、墮ちた者の人生を。

祖父は知っている、墮ちた者の結末を。
しかし、いい案が出ない。

「さてどうしたものかのー」

だから白髪の老人は、そう溜息を吐くのであつた。

第一話 学校

別段大きくなもなく、小さくもない「ビニ」でもありそうな校舎。校舎の中からは吹奏楽部だと思える楽器の音に、そのすぐ隣にあるグラウンドでは野球部やサッカー部などによる練習が行われていた。

そんな学校の門を、氷雨と雪はぐぐる。

一人が通っている学校は、周囲にある学校より平均的に学力は少し低く、しかし他県まで有名な部活動はない。要するにここでもありそうな高等学校だった。

「それにしても、疲れたな……」

「私も……眠たいわね」

そんな普遍的な学校を、彼らが選んだのに理由があった。
近いからである。

彼らが住んでいる山の神社から一番近いこの学校でも、徒歩で最低一時間はかかる。この学校は自転車通学が出来るのだが、それを使うとより時間がかかるので、一人は徒步で近道として柵を越えたり、道なき道を越えたりしていた。

二人はそんな苦労をしながらこの学校に通っている。

なので、一緒に通学するような友はいなく、一人で通つても暇なので、一人で喋りながらいつもこの学校の行き来をしているのだった。

「じゃ、氷雨また帰りね

「ああ、またな」

そして、玄関で上履きに履き替え、そこで姉弟は別れた。
弟である氷雨は、そのまま三階にある一年生の自分の教室の扉を開けた。

「よ」

「おはよう」

「よつー。」

そんな軽い挨拶を氷雨は低テンションで交わしながら、教室の中にある自分の机に座った。隣の引っ掛けに斜めがけのカバンをかける。

「それにしても、いいよなあ。南雲はあんな綺麗な姉がいて、毎日一緒に登校できて。オレならきっと禁断の感情が生まれてるぜ」

「オレもオレも。いや、オレなら襲つてるな。そして……ぐふふ。
はあ、本当にいいよなあ、南雲は」

氷雨が席に着くと、すぐさま彼とのクラスで仲がいい一人の男子が寄ってきた。

だが、まだ朝に必ず行われるSHRには一十分程度の時間があり、いつも氷雨がいるグループにいるメンバーには足りない。

もう一人は、いつも朝のSHR、ギリギリに学校に来るのである。

「おいおい、お前らは俺と会つといつもそれだな。それ以外に言つ

「」とほねえのかよ？

氷雨はまたか、と低く一人に返した。

これは、彼の友達である彼らの雪に対する賞賛は挨拶のようなものだ。

毎日飽きることなくやつており、だが一人にも氷雨の友達として“常識”はある。だから、“礼儀知らずの氷雨達の先輩”とは違い、脅迫じみた姉への紹介の催促はしないのだ。

「無い……かな？ だって南雲つて、大体の話題は軽く流すじゃんか！ ほかにどんな話題に食いついてくれるんだよ？」

「うんうん、氷雨つて名前どおりに、冷たいじやねえか。お前は、よ」

「だよな。オレもそいつ想つよ」

二人は、氷雨にわざわざ田を伏せながら話した。気分はさながらハリウッドスターである。

「そうか？ そりゃあ、悪かつたな。今度からは、もつちよつと付
き合ひつよ」

氷雨はまんまと騙されて、田を丸くする。

そんないつもとは一風変わった戸惑つような氷雨を見て、二人の同級生は大きく笑つた。彼はまんまと騙された、と舌打ちをしたのだつた。

「あー笑つた笑つた」

「お前、……いつか殺してやる」

「うわー。怖えよ、南雲ー。やつ怒るなって……」

「そうそう、確か今日が“あの”発売日だよな」

そんな笑い声も終わると、話題は変わった。

それは、今テレビのニュースでも話題のVRMMORPGの“ダンジョン・セルボニス”である。ゲーム好きでなくとも、一度はやつてみたいゲームナンバーワンと有名で、この話題性は未だ尽きていない。

「あのゲームかあ、欲しかったが金……がなあ……」

このゲームの発売価格は、世界初の体験できるゲームとして様々な最新技術を使っているとの理由で、ソフトとハードのセットで十万円とされている。

「いや、金があつても無理だろ。だって限定5000セットだぜ。オレ達にはコネがない限り無理だな」

そして、このゲームのもう一つのネックが、その入手経路。これは日本の企業が作ったので、どの国よりも早く日本で先行発売される。その数は五千個であったが、予約は既に開始してから十分で終わっていた。

「コネが無いと手に入れるのがほぼ不可能に近かったのである。

「確かに、オーダーショーンには百万と書いてあつたよな。つまりあれだけの大金があればオレたちにも……」

だが、数個だけこのゲームのセットがオークションで販売されているのがあった。数少ないゲームーたちの希望の星だ。

「あれって、詐欺も多いことテレビでやつてたなかつたか？」

氷雨がここにでやつと発言した。

最近ニコース番組で知つた知識を、言つてみる。

「だよな。つまり、オレたちがプレイするのは何年後になるか……」

彼の友達の一人が落ち込んだ。

その詐欺は現在社会問題にもなつており、一か八かでそれに賭ける人も少なくはないのだ。

「あーあ、うんりんいん雲林院のよつな金持ちの友達がオレにも居たらな……」

「無理無理、あいつはイケメン久遠にぞつこんだつたる。つまり、オレ達はおこぼれをまじらべらいしかないわけだ」

久遠、今この名前がチラッと出たが、彼はこの学校では雪並みに有名であつた。

名は光。

顔や目付きや鼻が欧米人の祖母の影響で酷く整つており、髪は金色。スポーツも上手く、勉強の成績も高い。そんな男として完璧な要素をもち、またこれを自慢しない謙虚な性格さえ持ち合わせる。なので、この学校の女子からは王子だと比喩されることもしばしばある。

要するにイケメンで、隙がない優等生なのだ。

そんな彼であるからして、困っている女子を助けることが多い、

非常にモテていた。その中の一人に雲林院という日本を牛耳るようなお金持ちまでいるのである。

そして、今はそんな彼が雲林院から希少価値の高い“ダンジョン・セルボース”の、お試しプレイを今日やるとこう情報まで回っている。

だが、もし彼に手を出せば学校中の大多数の女子から非難を受ける羽目になる。

だから、そんな彼と正反対の三人は、こうやってひそかに彼の事を愚痴る事しか出来ないので。

「そういえば、南雲の姉ちゃんはあいつに惚れてなかつたよな？」

「そうだそうだ。その点もあってこの学校では一番人気が高いんだ。やつぱりいいよ。お前の姉ちゃん」

（）でまた話題が氷雨の姉に戻った。

雪はミーハーなほかの可愛い女子たちとは違い、久遠に全くなびかない。

その点が、彼女がこの学校で男子達の人気を数多く集める理由の一つだった。

（けつ、姉ちゃんは男よりゲームなんだからしじょうがねえだろ。）

だが、氷雨は心の中で思いだしたことがある。

彼の姉の雪は他の女子に比べて、久遠に助けられる“こと”自体が無い。

そこらの不良には、氷雨と同じ武術で簡単に蹴散らすし、弱みであるオタクも家族以外には完璧に隠蔽しているからだ。

「それに彼氏がないのもポイント高いよな」

「そうだな。南雲、たしかお前の姉ちゃんあんな辺境に住んでるから男との接点もないもんな」

最後に彼女は、男より“ダンジョン・セルボニス”に関心が向けられており、彼氏を作る気などさらさらなく、現在も過去も居ないのだった。

「もうへ、この話題やめよ! やせば! 」

氷雨は嫌そうに言った。

それは、それがどんないい評価であれ、身内の話はあまりしたくないというむず痒い思いからだった。

「分かつたよ。それじゃあ次は一年のあの子の話にするか?」

「いやいや、それよりも、テレビで話題のある女優の……」

キーンゴーンカーンカーン!

JUNIORの開始のチャイムが鳴る。

「よーーうー オレ様! 降臨だぜ! !」

と、同時にうざい奴も来た。机の上に仁王立ちし、左手は腰にあって、右手の人差し指が天を向いている。わけの分からないポーズだ。氷雨の残る友人である。

普通の学生服なのだが、赤いたすきをかけている。ちなみにたすきの意味は、特になかった。

「……じゃ、またな

「……お、おひ

「……後でな

「ちょいちょいちょい！ オレは？ ねえ、オレは無視ですか？
？？ ここまで頑張ったんですよ！」

たすきの男は他のメンバーからは無視されるのだが、これもある
意味挨拶であった。

しかし、彼の学校生活の恒例の出来事は終わったのだった。

そして、これが、かけがえのない大切なものだと、彼が
気づくのにそう時間はかからなかつた。

第二話 始動

学校が終わり、放課後。

氷雨と雪は急いで家に帰った。

そして着替えもせずに、自宅にある畳が敷かれた部屋に向かう。そこは、一台のノートパソコンと一つのダンボール箱がある簡素な部屋だ。

雪はダンボールを開け、中に敷き詰められた梱包材を丁寧に一つ一つ取り除きながら、“リアル・カモフラージュ”という機械を取り出す。

それは頭につける大きな丸い装置に、それに沢山のコードが繋がれた小さな丸い機械が四つある装置だ。その小さな装置は、手首と足首の四肢につけるものである。

「姉ちゃん、これでいいのか？」

氷雨はそれを体に一つ残らず身につけ、畳の上に横になった。コードの内の一つはパソコンに繋がっており、既にパソコンには“ダンジョン・セルボニス”的ソフトがダウンロードしてある。これで、いつでもゲームを起動できた。

「ええ。でも氷雨、あっちにいたらどこにも行かずその場所で待つてなさいよ。ゲームのいろはも知らないんでしょ？」

「……わかったよ

氷雨はの頭の中は、既に興奮でいっぱいだ。
何ヶ月も待ったゲームが、いよいよ始められる、と。戦える、と。

だが、彼はどんなコネかは知らないが、今手に入れるのが最も難しいゲームを、弟の自分の為に入手してくれた姉に心から感謝している。だから、気まぐれに雪の言葉を無視できないのであった。

「 じゃ、はじめるわよ」

そして、この声を最後に氷雨の意識は失われた。
それは雪がマウスをクリックした瞬間である。

指が動く。
手が動く。
腕が動く。
膝が動く。
足が動く。
口が動く。

光を感じる。

それらは同時にに行われ、徐々に脳が覚醒していった。例えるなら、朝起きた時に近いだろう。そして、少し前の記憶を思い出し、ゲームの世界に来たんだ、と考えてから目を開けた。

「!..」

その眼下に広がる光景は、まるで変わっていた。

古びた畠も、何度も張り替えられた障子もない。代わりに合つたのは、上に雲がない快晴の大空。足元は並べられた石畠。周囲にはレンガで作られた町並みがあった。

「……うつわ！」

その、色が塗られた鮮やかな仮想現実^{バーチャル}の完成度に、氷雨は言葉すら遅れる。ここを現実だと思わない人は居ないと思つほど、現実に近い完成度だと彼は思った。

氷雨はそんな感動を胸に感じながら、佇んでた場所から少しだけ移動し、道の脇に並べられた区切りのような段差に座り込む。

雪を待つためであつた。

先ほどの自分が立つていた場所を見ると、ぽつぽつと人が突然現れる。どうやら臨^{リアル}このゲームを始めた者は同じ場所から始まるからだ。

そして、彼はそれに納得すると、自分の姿を確認し始めた。

服は紺の学生服ではなく布製の簡易なズボンとシャツだったが、それ以外は明らかに“自分”だ。顔を触り目の位置や鼻の位置、口の位置などを確認しても、それも“自分”だ。手の長さや足の長さ、全て現実^{リアル}と遜色がない。

だが、一つだけ違う部分があつた。

胸や腹などの体の中心部分の動きが少しばかり弱いのである。これは“リアル・カモフラージュ”という機械の性能上しかたがなかつた。頭や四肢の先端にしかつけないので、そこから遠くなればなるほど動きが僅かだが鈍くなるのだ。

しかし、それは氷雨のように全身の感覚が非常に鋭い人間に限つてである。一般人ならこのゲームをする上で気づきもしなかつたので、特に何の問題はないとゲーム会社は判断したのだ。

「よかつた。氷雨、ちゃんと待つてたのね」

氷雨が考察に耽つてゐると、田の前から自分と似たような雪が声をかけた。やはりだが、雪の顔も現実リアルと変わらない。

彼女は氷雨と同じ機械を付け終わると、すぐにゲームの世界に飛んだのであった。

それが、このゲームの特徴だ。

このゲームでは、仮想現実バーチャルをよりよく体験してもらうため、アバターといった自分の分身のようなキャラクターを作ることが出来ない。良くも悪くも現実の顔や身体が、そのまま影響されるのだ。

これに対しても最初、発表時にはプライバシーなどの反論などが多くあつた。

だが、メーカー側の身体のパーツを変えると最初のゲームの基礎的な動きが全く出来なくなり、慣れるまでに数週間の時間がかかる。それにこれに慣れたら現実リアルに戻つたとき身体が動きずらくなる、という弊害の説明の結果、反論は殆どなくなつたのだ。

「ああ。で、姉ちゃん、最初はどこに行くんだ？」

待ちくたびれたように彼は言った。

これからたくさんできる戦いに興奮してか、氷雨は貪りえゆすりをしている。おそらく、待ちきれないのだらう。

「決まつてゐるじゃない。 チュートリアルよ」

「テュートリアル？」

「簡単に言つと、ゲームの説明ね。ゲームの最初には必ずあるの。例外的にスキップできるゲームもあるのはあるけど、大体はこれを

受けないと先には進めないわね』

「だったら、早く行こうぜ」

『フフッ、でも、もう少ししたらこの場所で説明が入ると思うわ。そうWikiに書いてあったから』

雪は笑顔の氷雨を見て、少し笑った。
彼の貧乏ゆすりの意味が、分かったのである。

『皆さん、お待たせいたしました。こちらに集まりください。チューリアルを始めます』

そんな時だった。頭の中に電子音が響いたのは。
それと共に、そこに居た全員が、反射的に“その”声の方向へと目を向ける。

と、この時、氷雨はいつからだつただろうか、と考え始めた。この場所に存在していた人は誰一人減っていなく、増えた者もずっと居た。

なるほど、この場所に一定の人数を集めてから一斉に説明を受けさせる。ただしチユートリアルが始まるまでこの場所からは移動できないのか、と納得した氷雨である。

『氷雨、行くわよ』

氷雨がそんな考察を繰り広げて立ち止まっていると、雪が彼の行動を促した。そして、声の方向にあった一つの建物に、一人揃つて入つて行く。

カラソカラソ！

扉を開けると、甲高い鈴が鳴る。

その中はただの広い空間だった。暗く光の玉がいくつか浮かんでプレイヤーの顔を照らす地球上では、まずお目にかかるないような幻想的な空間だ。

だが、そんな場所に感動してゐる暇など、今は無い。

『ゲームの説明はこちから行います。画面をじ覗ください』

また、頭の中に響いた。だが、不思議とその音に不快感は感じられない。

皆は突然に現れた真ん中に映し出された映像を見始めたが、その殆どのプレイヤーは一人で見ている。

どうやら、一人で行動している姉弟が、この場所では異様のようだ。

『それでは、まづ……』

それから、ゲームの簡単なチュートリアルが始まった。

「……普通ね」

ゲームの説明としては、と雪は述べる。

それは数多くある武器の種類を軸に、一定の種類の武器熟練度を上げると使える技^{スキル}。そして、力量はどつやつたら上がるか等の説明。それに付け加えるように迷宮の簡単な仕組みや、フィールドの仕組みなど。他にはログアウトの仕組みとゲームオーバー時には所持金^{ステータス}を全て失つた上で最後にいた町に戻ることや、能力値の見方など、全て合わせて説明は五分程度で終わり画面がブツンと消えた。

『最初の軍資金として、プレイヤーの方々には1,000ギルを渡します。ご自由にお使いください』

突如、田の前の空中には布袋が浮かんでいた。それはふわふわと漂つており、手に取るとジヤラッと音を鳴らして、重力を取り戻す。ゲームのパートーンとしてはこれもよくあると、雪は言う。最初に手に入れたお金で装備や道具を整えるのは普通なんだ、と知った氷雨だった。

『最後にこれは助言です。北には、まだ行かないほういいと思いますよ。そこには、迷宮ダンジョンでも上位に位置する危険な動物モンスターがいますから……。では、今後とも“ダンジョン・セルボニス”を宜しくお願いいいたします』

この言葉を最後に、頭の中の声は消えた。

そして、用の無くなつたプレイヤーが次々とこの部屋から出て行くのだった。ただ、氷雨の顔だけは、なぜか少し綻んでいた。

そんな外に出た光景は、ある“一つ”を除いて入つた時と変わつてない。

それは“人”であつた。

プレイヤー、ノンプレイヤーキャラ問わず、先刻とは打つて変わ

つて人数が増えていく

「やあやあ、ユキ殿でいらっしゃいますか？」

そんな大勢の中、一人に喋りかけたのは似たような格好をした四人。

四人はまっすぐに雪を見つめていることから、一人をではなく、雪を待っていたようだ。

「ええ、じゃあ、もしかして貴方がノボル君かしら？」

「そうでござります！　いやいや会えてよかったですなあ！　それにしても美しい！　こんなお方と冒険できると思うと、こちらとしても心が踊りますなあ！！」

「ありがとうございます！　こちらこそ、宜しくね！」

皮の鎧に、腰に両手剣を携えた小太りのノボルと雪が笑顔で握手した。

氷雨は仲間はずれとされているが、この五人はとあるゲームで噂になるほどのパーティである。そんな雪を除いた四人は、今日だけ学校や会社を休んでおり、家にこのゲームが届いた時から集まってゲームの攻略を目指していた。

先程、雪から今から始めるとの連絡が入ったので、ノボル達は初心者が必ず通るこの場所に集まつたのである。

そんな中、ノボルは雪が連れて来た氷雨が気になっていた。

「ところでユキ殿、次はこちらの方を紹介してもいいでござりますか？」

「ええ、弟の氷雨よ」

「ほーう、ここの子がヒサメ殿ですか。いやはや、これからようじく
お願ひするであつまわ」

「は、はい、こちから宣じくお願ひします」

氷雨は固い感じで、差し出されたノボルの右手を握った。若干だ
が、頬も引きつっている。
どうやら彼は敬語がなれないようである。

「そんな緊張しなくていいでござりますよ。これから仲良しくしよ
うではあつませんか!」

「は、はあ……」

いや、氷雨は高テンションのノボルが苦手なのだろう。両手で握
った片手をぶんぶんと大きく振り回されながら、彼は苦笑いをして
いた。

「氷雨、この方は私達のゲームを入手してくれたのだから感謝する
のよ」

「ああ、うそ」

「いえいえ、ユキ殿。同士の頼みとあれば、断れる筈が無いではあ
ります!」

雪のゲームの入手先はこのノボルだった。

このノボルという男は謎であったが、ゲーム会社に多数のコネがあり、それを駆使して雪の分とは言わずこのパーティーの分のゲームは、全て彼が仲間の為にと用意していた。

その時、氷雨がこのゲームをしたい、と急に言つたので無理を承知にノボルに頼んでみると、二つ返事で了承との連絡が入った。もちろんそれぞれお金は払うのだが、それにしても六個分。へたしたら多くのこのゲームを手に入れている彼の素性はパーティーの誰も知らないのだった。

「オレも宜しく！」

「うちも宜しくね！」

「僕も宜しくな！」

何故だか、雪以外の全員がハイテンションのパーティーメンバーに、氷雨はまたも微妙な表情で順番に握手していく。

それは今日始めて会つたといえる雪も、同時に。

その四人は槍、弓、杖とそれぞれの武器を装備しており、鎧はノボルと一緒に。

スタートダッシュを早く切れているだけあって、その四人は周りの人たちよりかは豪華な金属製の武器で、幾分か強そうだ。

それは怪物モンスターを斃すと結晶が手に入り、その結晶を売つたお金でヨリ強い武器等が手に入ると、チユートリアルで言つていた。

それから考えると、彼等はどれだけかは分からないが怪物モンスターを少なくとも何匹かは討伐した事になる。ならば、力量も上がっているのだろう。と、氷雨は推測した。

「　で、ヒサメ君も当然我がパーティーに入るのは確定でありますよね？」

「」で、突然、氷雨にとつてノ衝撃の言葉を、ノボルは放つたの
だった。

第四話 ハレイ（前書き）

読者の皆さん、作者の勝手なわがままを承諾していただきありがとうございます。

作品の修正は少しずつですが、これからもご応援お願いしますね。

第四話 プレイ

「確かにそうよね。氷雨はゲームを全然知らないし……」

「つむもその方がいいと思うで。ここから東に行けば簡単に力量も上がるしな」

ノボルのその意見に次々と賛同の意が募る。空氣としては氷雨がこのパーティー、通称アンタレスに入るのが当然のようだった。

「氷雨くん、では、パーティーの手続きに行こうではありませんか！」

パーティーの手続きには、とある段階を踏む必要がある。それは一つはパーティー組合所という店に入り、そこ掲示板の中で自分が入りたいパーティーを指名する。その後、リーダーが許可を出すと、正式にそのパーティーのメンバーとなる。ここで注意は、一つのパーティーには六人までしか入れないということであった。

もし仮に、新しくパーティーを作りたい場合は、パーティー組合所で新規パーティーの要請をすると誰でもできるのである。

「氷雨、行くわよ」

と、雪が、氷雨の手を取りひとつすると、彼はその手を放った。
そして一言。

「嫌だ」

と、言った。

彼は、さつさと戦いたかった。一人で戦闘を、それも高純度の死闘を行ったかったのだ。そこに仲間などといつのは不要だと、氷雨は考えていたのである。

「えつ、どうしてあります?」

「なんでなんだよ? いつまでもあ悪いが、初心者には安売りだぜ」

「つむぎさん弱いわけぢやうしな。ほんまお得やで

「僕らは現在、このゲームの攻略の五本の指に入っています。なので、パーティに入りたい方は沢山いるんですよ」

氷雨のこの発言に、四人からは次々と驚きの声が飛んだ。

彼等、アンタレスはスタートダッシュが少しばかり遅れたが、攻略スピードが群を抜いて早く、とある初級迷宮ダンジョンを一つもクリアしている。これは、今、三組しかない凄まじいことで、彼等のパーティに入りたい者は後を絶たない。

それに、他の二組のパーティはじつくじと時間をかけて迷宮ダンジョンをクリアした。だが、彼らはWikiなどの誰でも編集が出来るWebサイト等で情報を集め、早々とクリアしているのだ。

「はあ、氷雨、いいからこのアンタレスに入らない理由を教えて?」

最後に雪が聞いた。

彼女は予想はついている。

獣のように獰猛じゅうもうな彼は、血を求めていた。それを祖父から教えてもらっていたからこそ、雪も氷雨の“戦闘衝動”を知っていた

のだった。

「決まつてゐるだろ。存分に、心行くまで、
“戦りたい”んだよ

最後に、彼はそう問題発言をした。

これに対し雪はやつぱり、と溜息を一つ。そして、冷静に基本馬鹿の弟の目指す場所を聞く。

「で、どこに向かうの？」

「北」

「…………でしううね。ま、死なないように頑張りなさいよ？」

これを最後に彼はこの“ヴァイスの町”を去った。

動搖の声はアンタレスだけでなく、耳に入った通行人までも発する。だが雪だけはそれを分かつていたように、呆れ顔をしていた。

「ユキ殿！ ヒサメ殿を止めなくてよかつたのでありますか？ あそこは……？ 北の森”は……とてもなく、危険な場所なのですよ？」

「いいのよ。あんな馬鹿はほつとけば、それより私たちには武器や防具を整えに行きましょう？」

そう実の弟へ冷たい雪に、アンタレスの仲間は戸惑つが、

「ゆ、ユキ殿がそう言つなら分りました。では、装備品の調達に行
きましょ!」

「お、おひ

「ええ

すぐにノボルの声に賛成し、五人はヴァイスの町中へ消えていつ
た。

そんな街中での五人の会話は、凄く明るいものであった。

「ユキ殿、知っていますか？ ヴァイスの西通りには、まだサービ
スが始まって数時間なのに“凄腕”的職人がいるんです！ 是非、
そこに行きましょう！」

「そうね。でも、私はまだ1,000ギルしか持っていないわよ？」

「（安心ぐだわ）」このノボルが、全てのお金を出すであります
……」

「ありがと」

「いえ！ 雪さんのためならこいつでも……」

実は“ダンジョン・セルボニース”は剣士や槍使いなどの戦闘技だ
けではなく、鍛冶や服飾などの生産技も充実している。
スキル

彼らはNPCが売っている装備を探しに行つたのではなく、同じ
ゲームプレイヤーが作り出した装備を探しに行つたのであった。

(さて、氷雨は何匹斃せるかしら?)

雪は街中でアンタレスのメンバーと話をしながら、氷雨のことを考えていた。

まさか、ゲームの仕様を全く使わずに戦う人間はどんな強さになるのか、という疑問に彼女は思いをはせていたのだ。

ある意味、このゲームを作った人間ですら考えない」とある、古流武術でのゲームプレイ。

(楽しみ……ね!)

「ユキ殿？ どうして立ち止まっているのですか？」

「『』めんね、すぐに行くわ

雪はいつのまにか立ち止っていたのか、ノボルに注意され初めて気がついた。

(ま、頑張りなさいよ)

雪はそう思つてから、仲間に追いつくまで走り出した。

テュートリアルで警告されるほど難易度を誇る“北の森”。まだ、このゲームのサービスが始まって、八時間ほどしか経っていない今の状態で挑むのは無謀とされている領域で、一組だけ挑んだパティーが居たが、結果は四分で全滅。

“北の森”を超えた先にあるとされる迷宮の攻略はおろか、森を通り抜けることすら難関とされる場所で、間違つても初心者が一人で挑むような場所ではないのであった。

氷雨は最初に持っていた1,000ギアで、上から羽織る灰色のフード付きマントを買っただけで、北の森に来ていた。

武器も無く、防具も無く、薬草などの回復薬もないゲームを舐めているとしか思えないような装備である。いや、ある意味ゲームをしに来たわけではなく、習った武術を試しにきた彼にとつては、当然の装備だと言えるだろう。

「はあ……はあ……」

そんな準備など全くしていない彼の状態だったが、この“北の森”に訪れて早十分、未だ彼はゲームオーバーになつていなかつた。これだけでもある意味彼は、ゲームプレイヤーの中の異常だと云えるだろう。

人が作つたとされるような道は無く、全てが縁に染まつているこの森。

危険、そうチユートリアルで言つたのも氷雨は納得できた。
自分に襲撃してくるのは強く、大きく、気高く、モンスター動物だからだ。
三百六十度周囲を常に警戒してなければ、いつゲームオーバーになつてもおかしくなかつた。

それにもまだ彼は“一匹”も討伐していないのである。

ササツ！

今も狼をモデルとし、体色が白で全長2メートル程の動物モンスターが、背後の草むらから飛びかかってきた。数は一匹。遭遇したのはこれで

三度目。

しかし、前回も前々回の遭遇時も最後には逃亡した。

それは、敵の弱点は分からず、素手の攻撃も効かず、間接も極められない相手に氷雨が苦戦していたからであった。

そして、今回も、隙を見つけて何とか逃亡した。

逃げた先は木の上。

ここまで良かつた。

だが、彼に休憩できる暇などなかつた。すぐに上空から鳥に似た動物モンスターが數十匹。氷雨は額にかいた冷や汗を手で拭い、足場の悪い幹の上で腰を低く構えた。

その鳥のような動物は、翼を畳み、鋭いくちばしで突き刺そうと、氷雨に向かつて落ちる。

一匹目は最小限の移動で避けている。ただ、皮膚を浅く切つてしまつたので、視界の左端に固定されているHPヒットポイントだけは、着実に減つていく。

「ちっ……」

十四日まではそれで攻撃を避けられたのだが、十四も来ると、急に氷雨は追い込まれた。

ここで枝の先端まで来てしまつたのである。

ピンチだつた。凄くギリギリの状況だつた。

だが、彼は慌てることだけはしない。

すぐに木の枝から跳躍し、下にいた狼がモデルの動物モンスターに、踵落としを行つた。既に氷雨の事を視界から外していたその動物モンスターは、上からの彼の攻撃を予測できず、頭蓋に直撃する。

ゴンツ！

鈍い音が響いたが、それだけであつた。

敵はHPがあまり減らず、大したダメージには繋がっていない。

「おめでとう！」

正面には狼。
上からは鳥。

それぞれに似た怪物を位置を確認した上で、氷雨は少し笑つ。
ああ、楽しい、と、この絶対的状況を分かつた上で、彼は笑つた
のだ。

「いやだよ、これ。今こののが欲しかったんだよー。」

た。

やつと、念願の“戦い”が出来る、と。戦れる、と。
モシスター
まだ、一匹も怪物を殺してはいない彼だが、既に敵を一匹殺
したような充実感に浸っていた。

だが、それに浸つてゐる余裕など無い。

上空の鳥の攻撃は二たる寸前で、狼も氷雨に飛び掛かっている。

その二つの攻撃をそれぞれギリギリまで引き付け、転がるようにして氷雨はその場から離れた。すると、鳥のくちばしは次々と狼を

狼は悲鳴を上げる。鳥は標的を氷雨から瀕死の狼へと変えた。

弱肉強食が、この世界の縮図だからだ。

人も亞人も怪物モンスターでさえも、弱者は強者に虐げられる。このゲームはそんな重厚な世界観で作られていたのだ。

「はあはあ……」

氷雨は疲労した体で、その場を離れた。

この数瞬の激闘は結果的に氷雨の勝利となつたが、彼の力量は上がりついなかつた。このゲームでは、自分もしくはパー^{レベル}ティーメンバーが怪物モンスターを斃さないと経験値が手に入らないのである。したがつて、本来貰えたはずの莫大な経験値によつて起ころるレベルアップが行われなかつた。

ガサツ！

だが、そんな彼に、休息の時間など与えられない。また、すぐにどこかで草が動く音が聞こえたのだった。

（今日は満足したし、そろそろ帰るか）

それから數十分、彼はずつとその森で彷徨ついていた。その間、数多くの怪物モンスターと氣を抜けない攻防を行つていた。

HPは少しずつ減つていたのだが、0になることはなく、氷雨は結局ゲームオーバーにはならなかつた。

そしてほどよい戦いの満足感を感じていた彼は、そろそろログアウトしようと思っていた。

それはメニュー画面に搭載してあつた時計を見て、夕食の時間だと知ったからである。

もし、夕食の時間に遅れたら、姉に叱られる。この折角のゲームが出来なくなるかも知れないかと、危惧した結果だった。

「メニュー、オン」

そうして、テュートリアルの説明にもあつたメニューを開けると、目の前に透明の液晶が現れた。その中にはログアウトのボタンがあり、氷雨はそれをタッチした。

また、あの意識が消失する感覚がくる。

こうして、彼の初日のゲームプレイは終わった。
これが最後のゲーム　とは知らずに。

今回の氷雨の討伐数0。　未だ、力量^{レベル}1。

第五話 リアルとバーチャル

夢から覚める。

氷雨の現在の感覚だった。少し前までの程よい殺氣と適度な戦闘の後だったので目など開けず、ずっと、ずっと、その感覚に包まれていたかった。

「おいおい、これ……なんだよ……つー」

「お、俺、ログアウト……したよな？ おかしいだろ、これつー！？」
「お前ら、何者なんだよつー!? 管理者か？」

だが、そんなわけにはいかない。

傍らから聞こえるのはしょぼくれた祖父の声ではなく、凛とした姉の声でもなかつたからだ。声質は上がり、次々と湧き出る情けない言葉。

(チツ、黙れよ)

氷雨はまだ目を開けず、言葉の主をそつと想つた。“今”の自分がどんな体勢でどんな場所にいるかなど、些細な事だと考えていたからで、悲鳴を雜音の「一ラスだと判断したのである。

彼は興が削がれたような煩わしい気持ちで、視界に光を受け入れた。

(……あれ?)

彼は首をかしげた。

そこにはざつと見て、五十人は存在するだろう。

氷雨を中心とした手を縄で縛られた数十人の人間に、剣を持つて囲う数人の戦士。戦士の眼は鋭くギラついており、常人の目じゃない。幾戦の死闘を渡ってきた“武芸者”の、眼であった。

その様子を見て人一倍察しの悪い氷雨は、欠伸を一つ。

彼の思考は表面的には機能しているが、実際は寝ぼけが半分ほど混じつており殆ど働いていない。阿鼻叫喚を響かせるこの領域で、ただ一人彼だけが慟哭せずに、樂觀していたのだ。

慌てるなあ、と。

(ふう、腹減ったな)

と、お腹がぐーと鳴った時、氷雨はある違和感に引っかかった。お腹が空いたのだ。否、それだけではない。

もし、ゲームの世界ならここまでお腹の動きを再現率が低いはずなのに、今は腹の全てが“完璧”に動く。腹筋や背筋も、だ。ゲームの世界では無かつた筈の稼動率である。それは、現実リアルと体全ての動きがなんの遜色もなかつた事を意味する。

「聞いてんのかよ？ 僕達のロープを解いてくれよ！」

「そうだそうだ。ここのはどこなんだよ？」

氷雨同様、縄で後ろに固定された人間が、周りの剣士達に声をかけた。その剣士以外の誰もが、初心者用の装備である同じ型の布の服である。氷雨だけはその布の服の上に、安っぽいマント一枚着ていたが、それはお世辞にも防具とはいえない薄いものだ。

初心者の服は同じで、その上から防具や武器を身に付けたり、お

金に余裕が出来たら布の服もより高価な物に買い返されるといつし
ステムが“ダンジョン・セルボニス”というゲームだ。

その説明を氷雨は覚えていた。

とすると、ここはゲームの世界で、周りの人間は自分と同じゲー
ムの世界の人間 つまり、ゲームプレイヤーと考えた。

しかし、氷雨はこの推測に自信を持つて答えられない。なぜなら、
ここがゲームの世界ならば、この腹の動きを感じられないからであ
る。

ゆえに、現実と仮想現実という二つの概念が、氷雨の中で激
突した。どちらとしてもおかしくはない。どちらとしても納得は出
来る。

でも、どちらと納得をしても、違和感だけが残った。

現実ならば、自分がいるのは家のはずだ。今頃、実の姉と実の祖
父と一緒に住んでいる家の畳の上にいる。こんな丸裸の土の上で座
っているなど有り得ない。

ならば仮想現実とすると、自分はあの危険な怪物が多く出現する
“北の森”にいるだろ？ 怪物ではなく、人が何十人もいるなど考
えられない。

それにHPの値も視界に無かつたし、メニュー画面も現れなかっ
た。

氷雨は少ない脳を絞つて思い出す。

自分は確かにログアウトした、と。その時、ログアウト以外のボ
タンは触らなかつた、と

他に情報はないかと探すが見つからない。手詰まりであつた。

そんな風に、無言で思考を巡らせていくと、突如、声が鳴つ

た。

「貴様、聞こえますか？　君達は我々の“奴隸”となつたのです！」

ゲームプレイヤーであるう人の、質問に答えるかのように、遠くの壇上に立っていた煌びやかな貴族風の豪華な衣装の男が高らかに言つ。

残酷な内容を、あつさつと。

これに全員が声を失つた。

皆が、誰もが、理解したくないのだ。

その単語の意味も分かる。その言葉も通じてる。ゆつくりと、頭の中で何度も何度も何度も確認をする。そして、ぐつと 飲み込んだ。

「ふざけんな！」

「私達を家に帰して！」

「開発者はどうしているんだ……」

「」にいる原因は不明だが、“弱者”に落ちた、と。それはゲームプレイヤー達は分かつていた。

しかし、それぞれが無駄だと言わず、口々に反論した。

納得できないのだ。

奴隸という身分に。もし、勇者や英雄としてなら、もっと高貴な立場なら、こんなに反抗はしていなかつたかもしぬない。

「 黙らせなさい」

けれども、その行動が逆効果だつた。

“上”の人間が、“下々”の人間の戯言などに付き合ひの暇は、どこの世界でも無いものだ。“上”の人間は、常に自分の事を優先させるからである。

「はい、カナヒト様……」

剣士の一人は、貴族風の男の命令に従い、腰にあつた剣を抜いた。

意味は子供でも分かるはずだ。

沈黙を要求するのに、最も簡単でこの上なく早い方法は恐怖で相手を縛る。これが最も早く、ある意味単純な方法だ。

「あ……あ……」

それは誰かの嘆きだつた。

剣士は別に誰でもよかつたのであるつ。

男でも、女でも、老人でも、中年でも、若者でも、子供でも、脅しつけるのは誰でも。

そして 剣を振るつた。

それは一番近くに居た男の太ももに当たり、線が走る。血は勢いよく飛び出た。次に出たのは斬られた男の声にならない悲痛。彼が悲鳴を上げなかつたのは、今度声を出すと殺されるとつさに思ったのだ。

男の、いい判断であつた。

これに、誰もが静かに冷静を失う。

ゲームの仕様では怪我などせず、怪物の攻撃でも痛み一つ感じな
モンスター

い。ただ、HPが減るだけ。

だが、今の状況は違う。

転されたら傷を負ふこと
転されたら痛いとして
人間として当たる

だが、誰もそれを口には出せなかつた。

恐怖という針金が、全身を強く縛つているという感覚が、心に染み込まれたからだ。獅子が鞭に怯え芸をするように、溺れた人が水を怯えるように、殺されるかもしれないという“最悪”の予測が、脳裏に染みついた。

それが悲しい現状だつた。

「ふふつ、何度見てもこれは飽きませんね。素晴らしいです」

貴族風の男は口にならして、自分の聲かな“所有物”を見て嗤う。

の財が手に入ると嘆いたのだ。

一方的に、下から搾取し続ける権利があるからだ。

同時に、“下”にはなりたくないとも思つ。

との権利が無いからだ。生きざす殺さず働き続ける。使い捨てのよう死んでいく。ただ、それだけの存在にはなりたくないなかつた。

男はまた、嗤う。

プレイヤーの中には反乱を起しあたいたいと思つ者も居たが、手が縛

られたままでは、無駄死にになるしかない。

ぐつ、と唇を噛み締め、辛い未来に、堪えるしかないのだ。
そう達觀していた。諦めた、と云つてもよかつた。

(……)

けれどたつた一人 例外がここにいた。
多数の怖さに震える人間が存在する中。仮想現実じゃない現實に、
より喜び、より愉悦し、より感動し、震えていた人間がいたのだ。
萎えた感情も蘇り、下を向いた座つた状態で、

最初に、「ゴキッ、誰にも聞こえぬよう、手首の間接を抜くように
無理やり外した。関節が外れて縄が緩むと、両手を拘束から外した。

次に、「ゴキッ、と誰にも聞こえぬよう今度は関節を無理矢理入れ
た。手のひらを地面につき、全体重を片手にかけるような感じで、
一個ずつ両手の関節を入れたのだ。

そんな彼には、現実リアルという心地よい激痛が走り、貌に笑みが宿つ
た。

最後に、ポキッ、と誰にも聞こえぬよう座つたままで、全身の骨
を満遍なく動かした。

首も。
肩も。
腹も。
足も。

全ての動きは、正常であつた。どれも十全に動かせる。

これで、彼はいつでも“衝動”を解き放つことができる。

戦闘という、衝動を。

自分の状況の見当などさっぱりであったが、一つ分かるのはあの貴族や剣士は悪者なので、殴つてもいいとの事。初めての人相手という“戦い”が、彼を怪物相手の時よりも興奮させたのだ。

あ、と。

第六話 初戦

カナヒトがあくのゲームプレイヤーを見て、嗤つてゐる最中、

「ははつ
」

彼も嗤つた。

顔を伏せ、口角を上げ、座つたまま。手は後ろにあるままで、見た目の変化は何も分からなかつた。だが、会場は静かさに染まる。

異常だからだ。

草食獣が、肉食獣に笑いかけるように、下の者が上の者を貶すよう。本来ならありえない現象だつたからだ。そのため、周りのゲームプレイヤーも、剣士も、貴族風の男でさえも、その嗤つた人物を信じられないような目で見た。

「ああーおもしれえ。非常におもしれえよ
」

見知らぬ人物に語るようなその声は、静かな広場に響き渡る。この時、誰もが彼を注目した。

そこは異様な静けさだつた。風も、木の葉が掠るような音も、息でさえ、大きいと思えるほど静かだつた。

「さあ、戦^やろうぜ」

彼が脈絡もなく、そのなんの変哲もない顔を上げた。それは歓喜に染まり、快感に溺れ、快樂を求めるような貌だつた。

彼の貌は 獣の貌だつたのだ。

戦いに餓え、血に餓え、勝利に餓えていた現実。

貴族風の男は、彼が勝手に決めた悪人である。ならば、我慢しないでいい。誰に拳をぶつけても構わないという考え方になる。そんな風に、免罪符を得たような気がした。

と、同時にこれが彼の“本性”であった。

危機的状況では、その者の剥き出しにされた心が見えるという。ならば、この“戦いたい”という欲求が、彼の全てなのだろう。

「なつ、なにがつ！　なにがおかしいんですつ！　誰でもいいのであいつを黙らせてくださいつ！」

当然、狂ったような事を言い出す彼に、貴族風の男はうろたえた。訳が分からぬ、と。そして、すぐにその気持ち悪い貌をトドメをさすよう剣士に命令する。

ゲームプレイヤーで出来た円の真ん中より少し外れた彼に、囲んでる十人の内の一番近い剣士が近づく。座っている彼に、命令どおり、剣を抜いた。

「はつ！？」

それは一瞬の出来事である。

誰もが予想にしていなかつた“結果”だつた。

彼が、“氷雨”が、立ち飛ぶように剣を避けたのだ。

縄が無く、全身が自由になつてゐる彼の姿を見て、貴族風の男をはじめ様々な人間が驚愕に染まつた。

「ふふっ、どんなトリックを使ったかは知りませんが、問題ありません。たかが、力量レベル1です。この中の底辺の中の底辺です。」

「雑魚」は蹴散らしなさい！」

貴族風の男は慌てはしたが、取り乱しはしなかった。

氷雨が、力量^{レベル}が1だからである。この世界では、生まれて15程度の人間ならば必ずしも2以上は持っている。それがどんな職業でも、だ。稀に体が病弱な場合などに限り、1というケースもあるが稀は稀だ。滅多にない。

それは男が奴隸^{レベル}にしたがつてているゲームプレイヤー何十人も同じだ。彼等の力量^{レベル}は平均5。最高は12で、最低が彼の1。彼だけが力量^{レベル}1のため、貴族風の男は氷雨の顔をよく覚えていた。

力量^{レベル}だけに意識をいき、彼を雑魚を決め付け、その鍛えられた肉体は氣にも止めなかつた。

その力量^{レベル}絶対主義は、剣士にしても同じである。力量^{レベル}のみを氣にし、30程度を彷徨つてている剣士たちにとつて、己の十分の一以下などが反抗するなど、万死に値すると思つた。

「死ねつ！」

だから、その剣士は己の頭で彼の強さについてなにも考へず、今度は横に薙ぎ払つた。

彼はそれを潜るように避け、剣士の体制を崩す為だけに、拳を剥き出しの顎に一発。予想外の一撃に、体を揺らしながら己^{レベル}惑う剣士。

「まつ、死ねや」

その後、彼は剣を持っていた右手を、引くように自分の元へ引き寄せる。その向かってくる相手の顔を両手でしつかりと、抱きかかるように掴んだ。

ポキッ！

そして、首を掴んだまま、前転のよつに剣士の向ひの側まで飛んで、曲がらない方向まで首を曲げた。

男は、天を見上げるような顔の位置のまま頸椎が圧迫される。そして、今折れ曲がった首に、今度は振り返った勢いのある裏拳が破裂する。上を向いたまま首を横にしたおかげで、完全に気道などを閉じられ、絶命した。

首の骨の音が折れる音は、呆氣なく鳴ったのだった。

男は白目を向き、涎は口から溢れ出た。その姿は、かの有名な武蔵坊弁慶の立ち往生に非常に似ていた。

「嗚……呼……」

友の変わり果てた痛々しい姿を見て、仲間の剣士が嘆く。
それほどまでに、死んだ兵士は痛々しい姿だった。

「おいおい、あいつ正氣かよ！ オレは……大丈夫だよ……な？」

「いや、これは夢だな。そうだ。そうに違いない」

「キヤアアアア――――――！」

一方、ゲームプレイヤー達も始めて目にした“人殺し”の光景に戦慄を覚える。

ある者は氷雨に恐怖を見た。

ある者は現実逃避をした。

ある者は耐え切れなくなつた恐怖に悲鳴をあげた。

この広場は一気に騒がしくなる。これまで亀裂が入りながらもなんとか決壠を逃れていたのが、“殺人”というきっかけにより、ゲームプレイヤーという集団のパーティクルを引き起こしたのである。

縄で手を縛られているため、立つことしか出来ない彼ら。

だが、もう一つ剣によつて動いたら殺されるという針金が、彼らを縛っていた。だから立つたまま彼らは足踏みだけをして、動けずに居たのであった。

(以外だな。まあいいか。さて、あいつは弱かつたのだが、この中で誰が一番強いんだろう？)

そんな中、初体験した人殺しに氷雨は、罪悪感を微塵も感じなかつた。

気持ち悪くなる、と本や漫画ではよく書いてあつたが、そんな気持ちちは湧いてこない。むしろ、早く次がしたい、という感情が強かつた。

そんな氷雨は人間として最低ながらも、次の獲物を探す。まるで血の味を初めて覚えた獣と、同じ行動だった。

きょろきょろと彼は辺りを見回す。

六角形の壁によつて閉ざされているこの広場。出口は二つ。その両方が脇を屈強な槍を持った兵士で固めており、彼らも強そうであった。

だが、彼の脳は“より”強い獲物を見つけ出す。
そして、見たのは貴族風の男。

正確には貴族風の男の護衛である一人の剣士を見ていたが、この場の全員が“にたあ”と嗤つた氷雨の顔が貴族風の男に向けられたと思った。

トスツトスツ！

一步ずつ一步ずつ噛み締めるように大地を踏め締めながら、氷雨は標的に向かつて歩みを進めた。

それに、ゲームプレイヤーは皆、道をあけた。

殺されたくない、という一心からだ。今の氷雨は、見るだけで怖くなるほど、殺氣立つていたのだった。目が合つたら殺される、そう思つたほどだ。

「嘘をんッ！　あいつを殺したら特別ボーナスをあげますっ！」

そんなモーゼの海割りを垣間見て貴族風の男は、“にたあ”と呟つた氷雨の殺意に、顔面を蒼白にし怯え、奴隸なんかよりも自分の身を守ることを考えた。剣士がこれだけいたら勝てる、と男は思ったのだろう。

剣士は特別ボーナス、という輝きの持つ言葉に引かれ、氷雨に近づいた。氷雨を囲んでいたゲームプレイヤーも剣士から離れた。これにより、氷雨、貴族風の男、剣士の間に人は無くなつたのであった。

(やつた！　これで死中に活ありだ！)

その頃、混乱の中でゲームプレイヤーの一人が動き出した。順調に進めていたゲームからログアウトすると、仲間の雲林院や雛形と共に氷雨と同じようにこの場所に居た。

彼こと、久遠光は仲間を助けたかった。だが、迂闊な行動に走ると死ぬ、というのがあの剣士の行動で分かり、助けたいのに助けられない、非常に歯がゆい思いをしていた。

だが、そんな彼に好機が訪れたのだ。

氷雨が剣士の一人を殺し、彼が敵の目を全員引き付けていたからである。

久遠はばれないように殺された剣士に近づき、そつと足元に落ちていた剣で、後ろに縛られた縄を切つたのだ。

あいにくそれは、ゲームプレイヤーも、剣士も、カナヒトも、氷雨を注目していたので誰にもばれなかつた。

「静かにして……」

「はい！」

「ええ！」

その剣をこつそりと持ち、久遠は仲間の雲林院と雛形の縄を切つた。彼女らの頬は、久遠という王子様に助けられたことにより、ほんのり朱色に染まっている。だが、そんなのを久遠は気づいていかつた。

久遠はその後、騒ぎにならないように、近くのゲームプレイヤーの縄を切つていくことになる。

そして、これが次なる“混沌”を招く。

第七話 混戦（前書き）

読者の皆様、変わらない応援ありがとうございます。
これからも頑張るので、気軽な感想などをよろしくお願いしますね。

第七話 混戦

(一発か……)

氷雨はカナヒトへと歩きながら、体の調子を確認していた。体に異常があったのは両手で、やはり、関節を無理やり外し、無理やり嵌めたので痛い。

右手に殴れないほどの激痛は無いが、左手は使えそうにない。先程の裏拳により、手首から先の感覚がもう無いのである。

そう考えると、右手も一度しか使えなかつた。一度だけ使つた左手の感覚が無くなつたことを考えると。

残り一発の弾丸で、十人以上の戦士を斃さなければならないのだ。
だが、この絶体絶命の苦境に より彼は燃えた。
目を滾^{たき}らせ、手が駄目でも足があると。

そう考えると、剣が峰に立つていたとしても、貴族風の男の隣にいる剣士へ氷雨は全速力で 走れた。

「旦那様のために死ねつ！」

彼が地を駆けると、右からすぐに邪魔者が飛んできた。

氷雨は斬り下がる剣を一步下がつて避け、剣を掴んでいる両手を蹴る。武器が無くなり剣士を無力化できたので、氷雨はそれ以上その剣士に攻撃しない。

彼の目に映つてゐるのが、弱い剣士ではなく強い剣士だからであった。

「……」

今度の剣士は、無言で突いてきた。前の男は声を出して攻撃したから氷雨に気づかれた、と思ったためである。

彼はそんな攻撃を上に飛んで躲す。

そのまま遠慮なく蹴り、剣士の男を沈めた。頭への、上段蹴りであつた。兜の上から遠慮なく蹴ったため、足に痛みが奔るが、両手の激痛に比べるとなんてことはない。

氷雨は足の痛みなど気にせず、また狙いの男に向かう。

「はあっ！」

「ひゅっ！」

次は一人同時に、氷雨へと切りかかった。

その一人の頭に、氷雨の力量レベルが低いという意識は既にない。これまで、三人も楽に斃せた彼を強敵だと認識し、油断は微塵もなかつた。

だが、それも氷雨には通じない。

二人が攻撃する瞬間、一度だけ止まり、また走り出したのだ。そのためタイミングを外された兵士たちの剣は、宙を斬った。彼等の攻撃は不発に終わつたのだった。

「皆、立ち上がりれっ！ 僕たちの自由を手に入れるんだっ――！」

と、そんな時だつた。

久遠が剣を頭上に掲げたのは。

とがらせた金髪に、端正な目鼻立ち。掲げた剣が太陽によつて輝き、後光が差しているかのような光彩がそこにはある。

殆どの人間が、怪しいと思えるほどの魅力的を持つ彼に目を向けた。その時、時間が止まつたと感じる者までいた。

「 全員で協力したら、数で対抗したら、どんな強敵にも勝てるに決まつた！ 僕たちの正義は、正義は必ず勝つんだ！！」

久遠は、自分達を正義だと決め付けている。

縄で自分たちを縛り、仲間の雲林院や雑形を危険な目に遭わせた彼等。それだけで、久遠の中では剣士他大勢を、何らかの理由がある可能性があることも考えず、悪だと決定していた。

まあ、当然カナヒトたちは悪なのだが。

これとは反対に、カナヒトは次なる危機を覚えた。

あの青年が居る限り、奴隸の反乱は簡単には沈静しない。圧倒的な武力により謀反を止め、反乱分子の根絶やしによって、初めて沈静したと言えるのだ。

これは反乱を起こす前に、奴隸たちを静めなければ自分の命が危うい、と貴族風の男は思ったのだった。

「奴隸達をつ！ 奴隸達を静めなさい！ “雑魚”は私の護衛がなんとかしますつ！ 先に奴隸をつ！」

だから、心から男は叫んだ。

それは、悲痛の叫びと云えるだろ？

「オレ達でもできるよなっ！」

「ああ、だつてこんなファンタジーな事滅多にないぜ？」

「正義は私たちにあるもんねっ！ 奴隸なんて制度を使う彼らが悪者っ！」

だが、時すでに遅し。

奴隸ならぬゲームプレイヤー達の士氣は上昇していた。それは、上限を知らなかつた。

久遠の剣によつて縄が解かれた十人は、それぞれが刃物も使わずに別のゲームプレイヤーの拘束を外す。自由になつたゲームプレイヤーは鼠算ねずみざんのように増えていつた。

それらは武器を持つていないとしてても、力量レベルが低いとしても剣士達には脅威である。

数が多いからだ。

数はそのまま力になる。かの有名なナポレオンは、数の利を生かして幾つもの大局に勝つたのであつた。

それに士氣の高さも、そのまま力に繋がる。

士気が限りなく上昇した者が、死に恐れなくなるからだ。恐怖を失つた者は、捨て身の攻撃を何度も行つ。捨て身などは、当たり前に。

ゲームプレーヤー達は久遠の言葉によつて士氣が上がり、そんな勝てれば死んでもいい、という異様な空気に包まれていた。

「ぐつ！」

剣士達は、そんな“空氣”にたじろいだ。

それは剣士たちの圧倒的有利な状態が終わつたからで、ここからは血みどろの勝つか負けるかの争いだからだ。

勝者が全てを得て、敗者が全てを失う
そんな戦いだ。

この戦い、分だけ見れば、おそらくゲームプレイヤーの方が高い
だらう。

いかに剣士たちの力量が高いとしても、それが有利になるのは一対一の場合だ。一騎当千の実力がない限り、人対人であれば4／5人で囮んでしまえばまず負けることが無い。

人海戦術が、戦場では一番強いからである。

そして五十人ほどのゲームプレイヤーは久遠を一番前とし、集まっていた。一方、十人程度の剣士も氷雨に軽く倒された者も含め、集まっていた。

それそれが、心を激しく滾らせながら

「皆、一人ずつ囮んで武器を奪え！ 武器を手に入れたらこっちのもんだ！ 勝つためには恐れるな！ 正義は僕達にある！」 勝利の女神は僕たちについてるっ…！」

久遠の咆哮と共に始広まつたのは 勝利への応援歌。

「勝つぞ！
負ければ死だ！！
全員歯を食いしばれっ！！」

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ପରିଚୟ

その反対に、一人の剣士の雄叫びから始まつたのは 制圧への

序奏曲。

一つの軍団は、まもなくぶつかるのであった。

「 ははっ、やつとだな」

そんなゲームプレイヤーと剣士による激戦の少し前、氷雨も貴族風の男とその護衛の剣士の元に来ていた。

護衛の剣士は貴族風の男の前に出て、氷雨と睨み合ひ。

「 お前の強さの理由は分からぬ。興味も無い。 だが、我輩をこれまでの者と一緒にするなよ？」

剣士は言った。

自分の実力はこの中で一番上だ、と。

そんな男の力量は40。^{レベル} 氷雨は知りなどしないが、それはやはりこの上で一番上であった。

「 けつ、上等だ」

氷雨は腰を低くして、半身になる。左足を前に出し、右手を腰元に構えていた。

彼は戦いに、ぶるつと震える。

武者ぶるいであった。

戦えることに歓喜し、強者と巡り合えたことに感謝し、興奮に痺れた体に支配された、彼だけの戦闘準備であった。

「ふんつ、減らず口が言えるのも今の間だけだ」

反対に、護衛の剣士は、腰の剣を抜いた。

太陽の光が鈍く光る剣。それは魅せるために作られたわけではなく、儀式のために作られたわけではなく、ただ人を殺すために作られた剣だ。

ゆえか、怪しい魅力があつた。

鈍色に輝くその剣には、人の目を引きつけて止まない怪しい魅力があつた。

「早く、早く雑魚を殺してしまいなさいっ！」

そして、この二人の戦いは、貴族風の男の罵声をきっかけに始まつたのだった。

ପାଇଁ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

ゲームプレイヤー達は勇ましく雄叫びおたけを上げ、死ぬという恐怖を取り除いた。

それにまともな思辨判断などない。

作戦ともいえない久遠の作戦に従い、各々が剣士に向かつて突進して行くのである。

その先頭は久遠であつた。

自らが旗揚げした鳥合の衆を率いるためだ。ばらばらな集団を一つにするには共通の目的を持たすことが最も早い。

だが、旗揚げした本人が率先して戦わなければ、その効果は薄いのだ。それを本能で理解している久遠は、仲間を守るという強い意思のもと、最初に走り出したのであつた。

「はあつ！」

久遠は一番近い敵に、持つてた剣をがむしゃらに振り落とした。武術の素養などない彼は、どのフォームが最も効率よく敵にダメージを与えるか分からぬため無茶苦茶な素人の振りとなつたのであつた。

そんなでたらめな攻撃は、やはり剣士に簡単に防がれた。
当然だろ？

どこに落とすかフェイントも全くない攻撃なのだ。むしろ防がなければ、剣士はこれまで何を習つていたのかという疑問をえ出る。

「弱い奴がオレ達に逆らうなっ！」

剣士は嘲笑つた。

ぶつかり合つた二つの剣は何度もぶつかり合つ。押されているのは久遠だつた。秀でた反射神経だけで、何とか攻撃を防いでいるが、後ろに下がりながら逃げているだけでは敵わないだろう。久遠もできるかぎり粘つてはいるが、いずれ負ける。これもこの“世界”では当たり前であった。

「はつー！」

だが、本来なら当たり前に勝てるはずだった剣士は、負ける羽目となる。

まず、ゲームプレイヤーの誰かが、血氣盛んに突撃した。剣士は久遠のみに注意を向けていたので、体と体はぶつかりあつた。そのおかげで一瞬の隙が剣士にできる。

久遠はそこを狙つた。

その瞬間剣士の剣を、自分の剣で塞ぎこむ。聞こえはいいだろうが、実際は剣を剣士の剣に押し付けているだけだ。

凶器の危険を少なくすることによって、素手のゲームプレイヤー達を活かそうとしたのだ。

「やれえー！」

「今だあーー！」

「オレ達が……オレ達が勝つんだあーー！」

そしてその魂胆が分かつた彼らは、久遠と同じように隣から何人

も何人もやつてきて、剣士の動きを封じ込んだ。

彼らの封じ込め方は、右足、左足、右腕、左腕を、それぞれ一人ずつ全身で止める。こうなれば、幾ら筋力があるうとゲームプレイヤーに抑えられない道理は無い。

所詮、どれだけ力量レベルが高かろうと、剣士も人間なのだ。筋力差はあるが、それはあくまで人間範囲のこと。

もし、彼等が別の“人種”なら、結果は違つただろうが、同じ人間ならばそう大きな差は出ない。

氷雨だつて、この人数に抑えられれば攻撃できない。それは彼もやはり人間であるからだ。

だが、彼ならきっと、その抑えられる前に、斃す。だから、先程の数人の剣士との戦いを退けられた。

集団戦では 力を抑えられる形になればもう“終わり”なのだ。

「うわっ！？ 止めろ！ 離せ！」

その封じられた後の剣士は無残であつた。

いくら力量レベル差があつても、大群には勝てないからだ。武器を奪われ、剣士は成すすべも数人に攻められた。ある者は馬乗りになり、ある者は手足を抑え、またある者は地味に鎧のない部分を蹴つたりと、そこに遠慮はなくリンクに近い。

彼等は“正義”という美酒に酔い、そこに罪悪感は全くないのであつた。

そんな風に、次々と彼等は剣士を大勢で蹂躪して行く。

誰かが決死の思いで剣士に突撃し、一瞬動きを抑えて他の者が次々と襲い掛かる。中にはゲームプレイヤーの中には、その突撃で大怪我を負つた者も居た。だが、ゲームプレイヤーは止まらなかつた。

崩壊したダムから流れる水のよう、逆に勢いは増えていく。

卑怯、と剣士達は思つただろう。

ゲームプレイヤーのまともに戦わない戦法に。だが、それを声を出す者は剣士の中に居なかつた。自分達も気が失つていたゲームプレイヤーをここまで連れて來たのだから……。

その数十分後、この場の主導権は逆転していた。

一方、氷雨はこの中で最強の剣士相手に苦戦していた。攻めきれないのだ。

剣というリー・チ差が氷雨を不利にしていたのである。

「チツ！」

氷雨は迫り来る剣を、バックステップで避けた。それを追うように、剣士はまた剣を薙ぎ払つた。氷雨はそれをぐる様に躰し、自分の間合いで近づこうとするが、剣士は氷雨が懷に入る寸前に後ろに下がる。

「けつ！」

「はつ！」

氷雨は男の剣を強引に潜り、顎を狙い右の拳を突き立てる。が、

男は氷雨の腹を蹴つて、そのアッパーを躱した。

護衛の男は“お綺麗な騎士剣術”なのではなく、戦いの中で築きあげた“自己流の剣術”で戦っている。それが何よりも、氷雨にとっては厄介だった。

「……！」

「しつこいつ！」

氷雨は剣士の傍に張り付いていたながら、上手く攻撃できないでいた。

隙がないのだ。

彼は剣士の攻撃を縫つて、さらに防具の隙間を狙わなければいけない。そんな“大きな隙”を、この剣士は作ってくれないのだ。

なので、こんな状況が繰り返される氷雨は、防戦一方であった。まず、氷雨には武器のリーチが足りない。70センチはあるかと思われる剣と腕の長さと足なら確実に足のほうが短く、リーチは短ければその分不利になる。

それに、防具の差も大きかった。防具で覆われている部分の多くに、氷雨の蹴り技は通用しないからである。体のどこを狙われても致命傷になる氷雨と、鎧のない部分しか致命傷にならない剣士。

速さは氷雨、後の基礎能力は剣士が勝つているだろう。

だから、氷雨は全ての攻撃を避けている。一瞬でも隙を見せればたちまち鋭い刃を体に浴び、死を免れないと本能で分かっているからだ。

だが、このままでは永久に決着はつかない。両者ともそう思っていた。

「 終わりだ！」

先に動いたのは剣士であった。

この状況を変えようと、剣士は数メートル近く氷雨と離れたのだ。剣士はそこで剣を構え、縦に振った。

(なんだ？ これに何の意味がある？)

氷雨は、この行動に最初は疑問しか持たなかつた。むしろ、休憩できるいい時間だと思った。だが、この判断は失敗であつた。

ブウーン！

鋭い風切り音が鳴つた剣からは、透明のガラスのような三日月状の“何か”が出た。

その瞬間、彼の野生の勘が働いたのか、“何か”が出ると同時に動き出していた。体を毛を逆立たせて、その場から脱兎のごとく離れたのである。

しかし、その行動は、もう遅かつた。

三日月状のそれは時速150キロ位出ていて、氷雨が完全に避ける前に、彼の左肩の皮膚を掠り、肉を抉る。血が舞つた。

この強い痛みが、彼の思考を混乱させる。

こんな攻撃は今まで見たことが無いのだ。

氷雨の目は大きく見開き、誰が見ても驚愕していたように見えた。

「はつ、その様子だと剣技のスキル一つ、『飛斬』も知らないのか？」

挑発するように剣士は言つ。

だが、剣技^{スキル}という言葉に心あたりのない氷雨は、まだ困惑している。

この剣士は、わざわざ自分の技の理屈を言つような馬鹿やお人よしではない。

無言で、その場から、『飛斬』を放つ。

いくつも、いくつも。

時には縦に、時には横に、時には斜めに、剣士はその場から動かず、縦横無尽に剣を振る。

剣からは幾つもの三日月状の“何か”が出た。

(スキル？ どこかで聞いたような……)

氷雨はその迫つてくる『飛斬』を全て避けきる。

縦のは右に、横のは跳んで、その全てを躊躇しながら、彼は頭を回していた。だが、頭には靄がかかつており、スキルといつのが中々出でこない。

血を土の上に垂らしながら、余計に氷雨の戦況は過酷になつていった。なぜならこちらは相手に近づけず、相手は離れた所から攻撃できるからだ。

(クソッ、頭がぼつーとしてきた)

そして、肩から流れ出る血が、より彼を不利にさせていった。血を失えば、正常な判断力を失うからだ。

『飛斬』を避けねば避けるほど、氷雨は集中力と体力を失っていく。

故に、動きが鈍り、先程まで躊躇していた筈の『飛斬』を受け、肌

に一つずつ掠り傷をつけていった。

氷雨は攻められないわけではない。

死ぬ可能性がある神風特攻のような攻撃なら、いつでもできる。だが、その結果は悲惨なものだらうもし、上手いこと賭けに勝ち、相手に勝てることになつても、自分が死ぬ恐れがある。それだけは避けたかった。

やつと、こんな世界に来れたのだ。どうせ帰るなら、この世界を堪能してから帰りたかった。

「クソッ！ クソッ……」

彼は攻撃を避けながら朦朧としてきた視界で、必死に探す。飛び道具を。石でもなんでもいい。固いものなら、投げられるものなら。だが、そう容易くは見つからなかつた。

やはり、世の中は非常なものだ。

そう自分に都合よく出来ていない。

氷雨は一発使えもしない左手で、自分の顔を殴つた。
大して痛くもない。

だが、活を入れた。たかだか、この程度の出血でなんだ。たかだか、この程度の怪我でなんだ。たかだか、この程度の不利でなんだ、と。

勝たなければ、と思う。

もつと、このゲームよりスリルな興奮を味わいたいからだ。

『飛斬』を避けながら、氷雨はマントの端を破り、大きな怪我の左肩を無理矢理止血する。
血の流れは、殆ど布の動きで止まつた。
もう一度覚悟を決める。

勝て、負けるな死ぬな、と。

「はあはあ、お前ももう少しで終わりだな。最後は我輩の剣で直接降してやるー！」

そして、有利な剣士の息は、既に切れかけていた。

この時、氷雨の脳裏にある“可能性”が浮かんだ。もう『飛斬』は出せないとこつ可能性だ。もし、無刃藏に『飛斬』を出すせるなら自分なら使つてる。相手が傷つき、倒れるまで使つてる。

ならばもしあの技に制限があつて、もう『飛斬』を使いないなら、近づけると氷雨は思った。

近づけたらこいつでも斃す手立てはある。

氷雨のその考えは、間違つてはいなかつた。男が覚えている^{スキル}技を発動するのに、体力の消耗が必要不可欠だからだ。^{スキル}技の発動時、体力が一定以下の使用は、満足に発動しない場合や発動してもそのまま氣絶する場合がある。

“冒険者”なら大体の^{スキル}技に、体力の消耗など常識であるが、冒険者ではない氷雨はもちろんその常識を知らない。

もちろん、男はそれを知つていたため、これ以上の『飛斬』の使用はしなかつた。傷ついた獣ならば狩るのは簡単だと思つていたからだ。

「けつ、せつてやる。せつてやるんだ。勝つんだ、よ。俺はな……」

氷雨は疲れなどを隠して、高くこき立つた。

「…」

だから、一か八か体に最後の活を入れ、腰を低くした。近づいてくる敵に、いつでも駆け出せるための準備である。

彼の頭は、大量のアドレナリンの出すぎで正常ならば機能する痛覚さえ失っていた。

ゆえに、いつもより、不思議と体が軽かつた。

「勝つのは俺だ……！」

之は弱弱しく、之は無事たゞへてゐる。

お互いとも、既に体は限界である。

いや、剣士は限界を超えてないが、氷雨は限界を超えている。左
腕の頭痛はかなり酷く、左腕自体の感覚がもう 無い。

ダンツ！

二人はまことに地を就る。

そんな一人が激突するまで、時間にして十秒もないだろう。しかし、貴族風の男にはもつと永く見えた。

そして、氷雨に近づいた男は、ぎりぎりの剣が届く距離を見切つて、剣を右から左に振った。

「なつ！？」

男は、灰色のマントで咄嗟に脱いで避けた氷雨に驚いた。

剣にまとわりついでマントのおかげで、氷雨の姿が消えた。かのようだつた。そして、男が目を逸らした隙に、氷雨は自分の得意距離である数十センチに移動した。

だが、氷雨も無傷ではない。避けたように思われた剣は腹の皮を一枚分切つており、そこから血が少しずつあふれ出る。

彼は腰の位置に構えた右の拳を、指を広げて四本の指を綺麗に揃えた。

男はこの時、少しだけ安心した。この世界では、“貫き手”などという技術がないからである。だからその危険性に、溢れんばかりの氷雨の殺氣に、気付かなかつた。

「まつ、死ねや」

彼は揃えた四本の指で、男の剥き出しな喉を狙う。

喉に指は深く突き刺さり、男は少ししてから 死んだ。それは「うつ……あ……」と、最後の言葉を残した剣士からも分かる。

そして、勢いよく抜いた彼の右手には、自分ではない赤い血が滴つていた。ぽとぽと、と地面に流れ落ちるのが、氷雨にもわかる。

「はあはあ……」

彼は体がぼろぼろな状態でも、十分なほど満足感を味わつていた。それは緩んだ彼の顔からも分かる。

「やつたぜ！」

だが、近くから聞こえるゲームプレイヤーの歓声のおかげで、その感覚に浸っているのもほんの数秒ほどだった。

「やつたぜ！」

「正義はやつぱり勝つんだ！」

「リーダー俺たちを率いてくれてありがとうー。」

ゲームプレイヤーが剣士達を完全に制圧した。
この動きにそう時間はかかるないのであつた。

彼等がぼこぼこにした剣士は、武器を取り上げられた上で、端つ
こに居た。かつてゲームプレイヤーが縛られていた繩で、体中を雁
字搦じがらみにされているのだ。兵士たちはみじめな気持ちであるつ。

そんな彼等を縛った張本人であるゲームプレイヤーは、広場の中
心で勝利の宴を開いていた。

「いや、皆のおかげだ！ この反乱は僕一人では絶対無理だつた！
皆ありがとうー。」

だが、そこにご馳走も酒も何もない。
けれども、人だけは居た。

数時間前まで、“ダンジョン・セルボース”をプレイしていたゲ
ームプレイヤーが、世界初のVRMMOのゲームをログアウトする
と、後ろで手を縛られ、貴族風の男には自分たちの事を奴隸だと言
われた人々が。

あのままでは、本当に奴隸になつてただろう。底辺の生活を送つ
ていただろう。そんな生活は久遠、彼によつて免れた。
救われたと云つてもいい。

そんな人々の中には、踊つてる人もいた。
泣いてる者もいた。

笑つてる者もいた。

様々な人々が様々な方法で、今の喜びを表現していたのだ。

「いや、リーダー！ あんたのおかげだ！ あんたが居なければ、きっとオレは奴隸になっていた。いや、間違いない。だつたら、オレは、オレを助けてくれたあんたに付いて行くぜ！」

「オレもオレも！ そしてオレ達に栄光と安全な生活を！」

「私も！ 貴方だったら危険が多いこの世界でも信じられるー！」

これからも、苦難は山ほどあるだろう。

もとの世界に方法も分からぬし、この世界では現代ほど満足に生活をおくれないかもしれない。他にも色々とギヤップがあるだろう。

だが、そんな不安も今だけは取り除けた。

久遠光、という英雄がいたからだ。

彼には感謝をいくらしても足りない。この場に居たゲームプレイヤーの誰もがそう思った。そして、誰もが彼についていこうと思う。それは彼にある独特的の魅力が成せることであろう。

そう久遠の栄光の第一歩は、これが始まりとなるのである。

第九話 次なる……

「あ、そうそう、忘れてたな」

「ヒイツ！」

突如、振り返った氷雨の発言は、貴族風の男に動搖を与えた。さらにそれだけではなく、全身に血を浴び、ところどころ赤くなつた布の服を着た氷雨を見ていて、恐怖は倍増する。

「ま、待ってください！ 私を殺すと、色々とデメリットがありますよー。だから……どうかどうかお情けを……」

貴族風の男は高価な衣装を砂で汚しながら膝と手をつきながら、殺されないよう懇願していた。

この場の主導権は、完全にゲームプレイヤーにあるからだ。生きている剣士は、縄に縛られている。門を守っていた門番は、とうの昔に逃げていた。つまり、貴族風の男に味方はいないのだ。

生きてさえいればいくらでも再起ができる。

そんな野心を田に宿らせたまま、頭を地につける。これは一種の賭けであった。

氷雨はそんな男に、無表情で近づいた。

そして、男と同じ目線になる。

「じゃあ、ここはどこだ？」

「……あ、はい。ここはクリカラの町の南部に位置するエルフィ

ンの森の一角です

「なら、ここの周りは森なんだな」

「ええ、そうです。ここから近いのは、北部はクリカラの町で、西部はエーテルの町になります」

男は人が変わったように、饒舌に話しだした。

氷雨はそれをうんうんと頷くように、聞いている。

これからのことを氷雨は考えていた。自分の状況がさっぱり掴めていない彼であつたが、お腹は空いている。人間の三大欲求である食欲には、どうやっても勝てない。

食べていくには働ければならない。

世界の常識だ。これだけは、時代が変わらうと国が変わらうと、常に変わらない常識である。盗みという方法もあるにはあるが、これはあまり好みではない。弱者と戦つてもなにも面白くもないからだ。しかし、自分を襲ってきた者や死んだ者からは遠慮しない。金品や売れそうな物なら遠慮なく貰う。

そして、氷雨は自分の行き先を、男の話で決めようとしていた。

「クリカラとエーテルはどう違つ?」

「クリカラは商業都市ですね。物の流通が盛んです。エーテルはここだけの話、かなり治安が悪いので、行くのは控えたほうがいいですよ。近くに“長年攻略の出来ていない迷宮”^{ダンジョン}があつてがらの悪い冒険者や浮浪児も多いですからね」

決まったな。

氷雨は行く場所を、そう心の中で決めた。

ところで、次の行き先は決まつたが、彼には聞きたいことがあつた。

「 で、どこで俺たちを見つけた？」

現在の立ち位置だ。

自分はゲームからログアウトしたはずなのに、現実リアルからは程遠く、仮想現実も近くない“第三の現実”にいる。

そして、その疑問を解決するためには情報がいると考えた。

そう、聰明な姉に教えられていたからである。

「森の中です。森の中にこの全員が寝ていました。だから私は剣士に頼んで、この場所まで運んだんです」

「へえーそうかよ……」

だが、結果は不発。

頭がいい人なら、他に質問することもあるだろうが、氷雨はそれほど頭がよくなかった。

(探すか……)

騒いでいるゲームプレイヤーを遠めで見て、そこに久遠や雲林院、離形など、自分の学校でも有名な連中を彼は見つけた。今日、学校に行くと友達は、久遠達が集まつて“ダンジョン・セルボニス”をすると言つていた。

そして、もし“ダンジョン・セルボニス”的ゲームプレイヤーが、この“第三の現実”に来ているなら、居るはずである。

同じゲームをしていた彼自身の姉である雪が。

頭では逆立ちしたつて勝てない彼女がいれば、この疑問が取れる
と彼は思った。

彼は、何か強い思いがあつて帰りたいわけではないが、帰れるな
ら帰りたい。そして、自分の家へと帰つて、祖父と戦つて勝ちたい
のである。

これは一種の野望であった。

祖父の老い先は自分が見ても短く、いつ立てなくなるかも分から
ない。ならばその前に、彼が一番強いと思ひ、祖父と戦つて勝つ、と。
「で、これだけ話しましたよね。もしよければ彼らに私の身を
安全するよう交渉してくれませんか？ これでもエーテルの自宅に
帰れば、たっぷりと支払えるほどの財産はあります。どうぞ
？ 私に協力してくれませんか？」

貴族風の男は、これでなんとかなると思つていた。ここまで話し
た。少しば見返りとして、親身になつてくれる、と。

「自分でなんとかしろ。俺がそこまでする義理はない」

だが、甘い。甘かつた。

氷雨には最初から貴族風の男の願いに応える気などは、ない。
聞くだけ聞いただけであつた。

「どうか、どうか、お願ひします。どうか私にお情けを……」

男は、少し破れたマントを剣から取る氷雨の服の裾を持って、必
死に願つた。

しかし、その慈悲を求める手を氷雨は乱暴に払つて、男に笑いか

けた。

「調子乗つてると……殺すぞ？」

「ヒイツー。」

だが、その笑みは決して優しさからくるのではない。「うとおしさから来るものだ。

彼は本当なら貴族風の男をのような弱者を殺したくないし、それ以前に殺す余裕などない。表面上にある凄みと羽織ったマントの間から見える血、この一つだけで貴族風の男を圧倒したのだった。

「あ、そりそり……忘れてたな

」

氷雨は一歩カナヒトから離れ、思い出したよつこまた近づいた。

「お前への借りが、な

「ヒイツー！　すいません……すいません……グボツー！」

そして能面のような無表情な顔で、貴族風の男を蹴った。殺すつもりはなく、ただ痛いだけの蹴り口一キックであった。彼は縄で縛られた仇を、この時返したのである。この時、奇怪な目線が彼に向けられる。

やはり彼は容赦の無い男であった。

氷雨は一つの門の内の一つに向かつていた。

方角は分からぬが、二つある門は対になつてゐるのではないので、その一方がクリカラにもう一方がエーテルに通じてゐるのは何となく予想できる。

先程の戦いで、破いたマントの切れ端で強引に血を止めた左肩の血は、もう止まつていていたので当てていた布をとつた。この止血方法は本来は間違つていたのだが、あの時はこれしか出来なかつたので我慢したのでだ。本来なら水で洗つてから、綺麗なガーゼで傷口を覆いたかつた。

あの時は肩しか覆えなかつた。今はどこでも覆える。だが、ほかのは全て大きくはないので、そのままにしておいた。血がまだ出ている箇所もあるが、いずれかさぶたができるだらうと思つたのだ。

もし、道の途中に川があれば、口を潤し怪我もとを洗いたい氷雨である。

「 ちょっと待つてくれ！」

「 は？」

だが、そんな氷雨を止めた人物がいた。

「 君のおかげで皆が本当に助かつたよ。ありがとうー。」

あの久遠であつた。

久遠は氷雨の戦闘によつて剣を得て、あの反乱を引き起させた。なので、久遠は氷雨にとても感謝していた。

「私もありがとうございます。貴方のおかげで助かつたんで、お礼は言つとくわ」

「あ、あ、ありがとうございます！ 貴方がいなければ私達は反抗できませんでした！」

氷雨はああ、と知つてゐる顔の久遠の隣にいた二人の女性を見た。上から発言は雛形、雲林院だ。

雲林院と雛形で、背の高い金髪が雲林院で背の低い黒髪が雛形だ。雲林院はスタイルがよく顔も整つており、どこから見ても美人。雛形のスタイルはお世辞にもいいとは言えないが、こちらも顔が整つており美少女であった。

「本当にありがとうございます！ むそらく、あの場に居た全員が君に感謝していると思つ。ところで、どうだりつ、皆で、もとの世界へと帰る手助けをしてくれないか？」

久遠は爽やかに両手で氷雨の手を握つた。その手は期待に満ち溢れ、きらきらと輝いていた。

そんな久遠の意見を、女性陣も賛成する。

「確かに光の言つ通りね。彼がいれば心強いし……」

「そ、そつですね。今回も助けられましたし、今度もきっと助けてくれるはずです！」

氷雨は一回、じつくつと心の中で考えた。

(仲間になるのは……いや、やめといひ。メリットもさうだが、

デメリットが多い。自由な行動は無理そつだし、そしてなにより、

“考え方”が違うからな）

ここでいうメリットは仲間だ。仲間が多ければ出来ることが増え、様々な可能性が飛躍的にアップする。氷雨一人では勝てないような強敵も、協力すれば勝てるだろう。

反対にデメリットは、好きなように戦えないだった。仲間が入れば敵は取られるし、戦いたい時に戦えない。

それにあの雰囲気を見るに、あの何十人全員が久遠の配下に加わるのだろう。“人殺し”的自分が、あの“人を殺していない”中にに入るには居心地が悪いとも思った。

それに、先ほど カナヒトを蹴った時に感じた視線である。

何故、そこまでするんだ、という視線から、彼を仲間に入れたくない、というムードが伝わってきたのだ。

そして、氷雨はこの三人と自分では、“考え方”が違うと思つ。彼等はあくまで他人の為に戦つてゐる。それは、自分の為に戦つ氷雨とは対極に位置するのだ。

久遠たちは、おそらく人を助けるならいくらでも命を賭けるだろう。だが、氷雨は出来ない。強敵と戦うことのついでに、人を助けることなら出来るが、それは似ているようで全く違う。

背中あわせのようで、それは真逆の考え方であつた。

「話は以上か？ 僕がそれに付き合ひつ義理はない」

彼は、久遠の手を払つて、短く淡々と三人に応えた。

呆然としている三人を見て、彼は門へとゆっくりと歩き始める。早く三人のいない町へと行って、飯をたらふく食べ、ゆっくりと休みないのである。

金は死んだ剣士が持っていたすかすかの巾着を奪つたので、少しはある。これは戦利品としていただいた。死んだ者からは何を頃いても問題はないだろう、と氷雨は強引に納得しているからである。こういった考え方もまた、久遠たちとは相いれない考え方であった。

「ああ、うん。そうだよね……」めんね無理言つて……それじゃあまた

「ひ、光、落ち込まないでよ……」

「ひ、ひ、光君、大丈夫ですか？」

久遠は断られるなんて思つておらず、且で明らかになるほど落ち込んでいた。

だが、そんな後ろの状況など全く気にせず、氷雨は広場を出て、自分の目的地である“エーテル”に向かつた。

治安が悪いほうが自分に合つてている、と彼は考えたのだ。戦いに餓え、戦いを求め、戦いを快樂とし、“人殺し”の業を背負つてゐる自分には。

広場から出ると、風を感じた。

森独特の爽快な匂いと、火照つた体を冷やす冷たい温度。それに丁度いい風量。

そんな全てが、心地よかつた。

上には太陽がまだ空を照つていて、真下には草が一本もない整備された道がある。

遠くには町が見えた。これなら傷ついた今の体でも、今日中にはつきそつだ。

そして、彼は次なる目的地へと、歩き出したのだった。

やがて、氷雨と久遠は時が経つと再会する。その時、二人の立場には大きな差があった。それがまた、大きな戦いを生むのであった。

第十話 不法都市

あれから数時間。

やっと目的地に着いた。

その町は暗い。いや、夜なので仕方がないといったら仕方がない。だが、電球で夜空を照らす日本の風景に見慣れた氷雨にとつては、とても暗く 不気味に見えた。

ゾワッ！

そして、そんな町に一歩入ると、その身の毛もよだつような異質な雰囲気に始めて気づいた。

それは一步入ったその瞬間、町中にいた全員が灰色のマントを羽織った氷雨を目測で図つたのだ。強いのか、弱いのか。金があるか、と。

平和な日本に住んでいた氷雨にとつて、感じたことのない視線であつた。

常に何かを怯え、他者を出し抜こうとするような、強烈な生への執着心。平和に溢れた日本ではまず考えられない感情だ。

それが、この都市の特徴だった。

この都市では大勢の犯罪者が“とある理由”で暮らしているため、国によつて定められてる法律が正常に機能しない。故に強奪、殺人、強姦などが当たり前に行われている。だから、この町では弱いものから死ぬ。

弱い者が搾取され、強い者が全てを得る。

そんな世界の縮図が色濃く出た町であつた。

そして、これが無法都市エーテルの最初の洗礼となるのだった。

「おばちゃん、宿屋は開いてる？」

氷雨は早く休みたかったので、三階建てぐらいであるう木造の宿屋に入った。この店を宿屋だと分かったのには理由がある。先程、金をチラつかせ薄汚い服を着ていた子供に、宿の場所を聞いたのだ。いい宿屋はないか、と。

そしたら、その子供が指した宿屋がここだった。

宿屋の中はホテルや旅館ほどの清潔さではなく、入り口は広くもない。冒険者が泊まる為だけに作られたような泊まるためだけの宿屋であった。

入つてすぐのカウンターに位置する女主人に話しかけた。

「いらっしゃい。おや、新顔だね。宿屋の仕組みは知ってるのかい？」
「いや、『この』宿屋の仕組みは知らない」

「ちつ、ちつかい、じゃあ説明するよ」

女主人は、氷雨に分からぬほどの小さい舌打ちをした。“この”を付けたと言つことは、この町にある他の宿屋に泊まつたことがあると考へたからだ。

もしこの町の“初心者”なら、部屋で寝た時にいくらでも金品を盗めるが、町の仕組みを知つているとそつとはいかない。

金目の物は隠すだろうし、寝る時も厳重な警戒をしてから寝る。この町ではいかなる時も、油断も隙もあつてはならない、と知つているからだつた。

こうして、氷雨は知らず知らずの偶然の内に、“戦いの種”を失つてゐるのであつた。

「以上だよ。分かつたら金を払つて、さつと食堂なり部屋へと移動しておくれ」

女主人による宿屋の説明はとても簡単で、終始けだるそつに説明していた。

臨時報酬が無いのが、よっぽど堪えたのだろう。だが、この町の宿屋はこれで普通だ。これでも良心的な宿屋である。酷いところでは、部屋だけでベットすらしない店もある。木の床に眠れ、と普通にいう主人もいたのであつた。

この宿の値段は夕食込みで、一泊1000ギル。

銀貨一枚分だ。氷雨はそれを今日の一泊だけ払つた。彼の残りの全財産は、残り銀貨一枚。明日、この宿に泊まるだけで終わつてしまつよう全財産であつた。

「あなたの部屋は二階の間だ。この鍵と同じ部屋に入るんだね」

「ああ」

氷雨は女主人から乱暴に鍵を渡される。

それを受け取り、彼は奥の食堂へと消えていくのだった。

氷雨は食堂でパンとスープといつこの世界では普通の食事を取つた後、井戸へと向かつた。夕食の量は質素で、味付けはほんのり塩が効いてるだけ。

現代食に慣れた氷雨にとって、味の濃さも量も物足りない食事であつた。

だが、これで我慢するしかなかつた。

その食堂には、自分と同じような客が沢山いて、中には彼より一周りも大きい人間でさえ、同じ食事の量で納得していたからである。金が出来たら、肉を腹一杯食べたいと思つ彼であつた。

「冷たつ！」

彼は上半身の服を脱いだ後、井戸の水で今日出来た傷口を全て綺麗に洗つた。

冷たい水は体にとても染みたが、自分の未熟な武術の腕のせいできここまで体を痛めつけたと思うと、何故だか氷雨は我慢できた。

これもそうだ。

両の引き締まつた腕に無数にある細い傷。これも自分の未熟さが引き起こした傷だ。この胸にある大きな切り傷も、背中にある丸い傷もそうだ。

度重なる修練の果てにできた勲章である。

氷雨は全てが誇らしく思つ。

姉は今日作った傷を見れば「また、無茶して」と怒ると思つが、これは自分の成長の証。一つ新しい傷を作るたびに度に、反省し、強くなつた努力の結晶だ。

今日、自分は初めて真剣勝負をした。武器を持った者と初めて対戦した。そして 初めての人殺しを経験した。

ほかにも、今日は様々なことが色々あつた。

そして、彼は、思う。今日、自分はまた成長した、と。

ここまで考えて、彼は宿にある自分の部屋へと戻った。
上半身裸で、夜風にあたりながら考えることではないな、と思つたのだ。下手をすれば風邪をひく。現在、体が商売道具である彼は、自分の体を労わらなければいけなかつた。

「寝るか……」

彼に用意された部屋は大きくなかった。だが、小さくもない。一人用のシングルベットと、丸い小さな机に椅子が一個。それに壁には火の消えたランタンがあるだけだ。

そんな部屋は、窓から差す青白い月だけで照らされていた。

ベットにある布団は固く、お世辞にもよく眠れそうとは云えない。地べたで寝るよりかはまし、といつた所であろう。

そんなベットに潜り込み、氷雨は目を瞑る。

明日の事を考えながら……。

彼の現在の装備、古びた灰色のマント。

所持金、1000ギル。

今日の氷雨の怪物討伐数0。^{モンスター}

未だ、力量^{レベル}1。

第十一話 初めての冒険（前書き）

PVが40,000。ニークが13,000を突破しました。
皆さん、本当にありがとうございます。

第十一話 初めての冒険

次の日の昼のことだ。

氷雨は冒険者ギルドへと来ていた。

金を稼ぎたかった彼は、この町にあつた巨大な迷宮ダンジョンに訪れた。すると、そこに居た門番にギルド公認通行証を持つていないと通せないと言わされたのだ。なのでその門番からギルドへの行き方を聞いて、ここへと来ていた。

“冒険者”の手ほどきも知らない彼にとつては、“冒険”の初歩を知るいい機会なのであった。

「姉ちゃん、こっちにも酒だ！」

「がつははつはは！ お前、死にそうになつたんだってな！」

「う、うるせえ、だから今日は昼間つから飲んでるんだよー！」

冒険者ギルド。

ここでのギルドの中は広く、酷いアルコール臭がする。

ここでは、酒場と受付の場所は分かれており、酒場のほうが受付より4倍ほど大きい。酒場では冒険者であろう屈強な男たちが、昼間から自分たちの武勇伝を肴にホール酒を煽つっていた。肴は各自的の武勇伝だ。

「迷宮ダンジョンの通行証をくれ

だが、氷雨の目的は酒ではなく通行証なので、酒場には田もくれずカウンターにいたアッシュブロンドの短髪の受付嬢に向かつた。酒を飲まない氷雨にとって、酒の匂いなど嫌な臭いに近いのであ

る。

「あ、はい、通行証ですね。再発行でしょうか？ 新規の発行であればこのギルドに登録してもらわなければなりませんが……一体どちらでしよう？」

「新規だけど、登録つてなにをすればいいんだ？」

「新規ですか……！ かしこまりました。少々お待ちください」

始めは事務的な態度だったが、新規と聞くと急に慌てはじめた。実はこのギルド 新規が入る時期は月の終わりに一回と決まつており、それ以外では新規登録がまず無いとされる。

今は月が終わった時期とは遠く離れているので、受付嬢は新規登録がないと思っていたのである。

「ありました。こちらに生体情報として血を垂らしてください。新規の登録手数料として、銀貨一枚がかかりますが宜しいですか？」

カウンターの下に潜つて数分、やっと受付嬢は顔を出した。下の棚にある申込書のような物を探していたのだろう。

受付嬢は、無骨な石をカウンターの上に置いた。これが 冒険者ギルドの申込書であった。

氷雨は受付嬢が言った、このDNAを調べるような方法に少し疑問を感じたが、気にはしなかった。

ここはこういう場所なのだと、無理矢理納得したのだ。

昨日、急に広場で目を覚ました彼にとって、信じないものはない。もし目の前に神様が現れたとしても、すぐに信じるだろう

「ああ、だけど刃物は無いのか？ 実は俺、刃物を持つていねいんだ

「ありますけど……一本も持っていないんですか？ 珍しいですね」

受付嬢は銀貨を出した氷雨を怪しそうに疑いながらも、自分が持っていたナイフを手渡した。

この町では、護衛のためどんな人間でも最低刃物を一本持つ。持つていないと言うのは大抵、ハンマーのような鈍器を持つ者が、もしくは見せられないような高価な刃物を持つ物である。だが、彼は鈍器らしき物を持っているような雰囲気はなく、かといつて高価な物を持つてそうな服装でもない。ところどころ切れたマントを着ているからだ。

「そうか？ 普通だろ」

氷雨はナイフを受け取って、手を軽く切った。手から出た血は、たらたらと石まで垂れる。

この彼の発言に受付嬢はまた疑るような視線を彼に送るが、彼はあくまで“日本”的常識を話したので、二人の間のずれは世界観のずれなので、当たり前といえるだろう。

“ここ”は、やっぱり“日本”なのではないのだった。

「そうですか……」それで登録は終わりです。後はお名前を教えてください

「氷雨だ。

「ヒサメ様。かしこまりました。この名前と個体情報を登録して、ギルド公認永久の迷宮通行証を発行するので、また少々お待ちください

さいね

受付嬢は、今度はカウンターの向こう側にある部屋へ消えてから数分後、またカウンターへと戻ってきた。

戻つてくると、カウンターの上に時計のような機械を置いた。

「こちらが通行証となつております。こちらは他にも力量レベルが上がると自動的に知らせる機能を持つております。どうしましょう？ このギルドのシステムを説明しましょうか？ 使用料として銀貨一枚がかかりますが……」

「いや、遠慮しとく。聞きたいことがあつたらまた来るし、別にいや

「分かりました。では、またこのギルドでお待ちしております」

氷雨はお金が無かつたので、受付嬢の申し出を断る。

受付嬢は何度も使い古された冊子を、すぐに片付けた。そこにはギルドの様々なシステムが乗つているのだが、この世界では紙が高価なため、全ての冒険者で共同に使つてあるのである。

そして、文字盤もなく、デジタル盤もない腕時計のような機械を氷雨は腕に巻き、この冒険者ギルドから出て行つた。

去つていく氷雨の後姿を見ていたのは数人であったが、その冒険者たちの顔は何故かにやけていたといつ。

「うして、晴れて新米冒険者となつた氷雨であった。

午後。

遙か彼方では太陽と空が混じつたような黄昏時に、彼は迷宮の入り口へ訪れていた。

門番は日中見た二人とは変わっていたが、この腕時計のような機械を付けているとすんなりと入り口を通しててくれた。

地上から見える“この”迷宮^{ダンジョン}の入り口は大きくて無い。地下へと続く階段が、地表に突然現れているだけだ。

「 気をつけな。そこから先は、冥府となんら変わんねえ」

「また、それかよ……この町でお節介をするのはお前ぐらいだな……」

門番の一人が言いあつてゐる。

この門番は、新顔を見ると助言のよつてこの言葉を書つ。誰か親しい者が中で殺されたか、迷宮^{ダンジョン}の中に、苦い思い出があるのかは定かではない。

だが、これが彼への忠告であるのは確かだった。

コトツコトツ

氷雨は、階段を慎重に降りていく。一步一歩周りに、敵に、罠に、注意しながら着々と先を進んでいくのだ。

やはり彼の頭の中では、先ほどの男の声が反響していた。

そこから先は、冥府となんら変わんねえ。

この言葉が槍となり、彼の心に深く刺さっていたのだ。

冥府 簡単にいえば地獄だが、他の言葉でいえば死後の世界。つまり、ここに足を踏み入れた時点で、棺桶に片足を入れているのと同義だと、あの男は言いたかったのだ。

だから、この忠告を素直に受け入れ、彼は階段を下りていたのだ。

(死ぬわけにはいかないからな。絶対に)

と、心に釘刺しながら、階段を降りていった彼に見えたのは、長方形の石で作られた床であつた。

床だけではなく壁も、同じ石で作られている。そこは広い空間で、天井には発光した大きな白い花があり、この花によつて奥行きまで確認できた。

(で、どうやって稼ぐんだ?)

やつと、迷宮ダンジョンへ到着した氷雨だが、ギルドで何の説明を聞いていなかつたので、金の稼ぎ方をあまりよく分かつてはいけない。

とりあえず売れそうな物を探そと、今いる大部屋を探索していくと、目の前から スライムが現れた。

「おつ」

半透明なゲル状で、プロブロしてるだけの怪物モンスター。体長は60センチ。横幅は40センチ。見た目ではそれ以外に特徴は無く、特出したような器官さえ無い。

ただ、その場で少しだけプルプルと振動していた。

氷雨は、そのスライムを見るとすぐに拳を握り、突きを放つた。体は全快とはいかない。昨日の怪我が残っているし、まだあちこちが痛い。

しかし、問答無用に放った突きは、とても綺麗な型であった。

体の動きに一切の乱れはなく、これ以上の突きであった。並みの武芸者なら、一撃喰らひだけで悶絶するような痛さだらう。

プリンプリン！

だが、そんな鋭い突きも、気持ち悪いぐにっとした感触と共に、スライムは軟らかく揺れるだけ。

ダメージなど 全く与えられてなかつた。

プリンプリン！

スライムは氷雨に飛び掛るが、彼はその攻撃を簡単に下がつて避けた。特別早くもないその攻撃を避けることは、誰でも容易いだろう。

それだけ敵は、のろまだつたのである。

プリンプリン！

まだスライムは震えていた。もう、一ぱり襲つてくる気配も無い。

だが、それが返つて氷雨には恐ろしく見えた。

まるで、己はいつでも攻撃できる。氷雨の攻撃では己の体に傷一つ付けられないんだぞ。などと気持ち悪い外見からは想像できない“高み”からの、余裕に見えたのだ。

氷雨はその苦境を跳ね返すように、今度は全力でロー・キックのような攻撃をした。しかし、また変な手応えと、不気味に揺れるだけである。

形はやはり元に戻り、スライムは反撃すらしない。

関節技は絶対通じないと悟つので、次は体を一回転した踵落とし。

スライムは揺れた。

次は手を全て開きそのままスライムへと直進に、掌底。スライムはまた揺れた。

突き、アッパー、フック、回し蹴り、飛び蹴り、胴回し。既に氷雨は、普通の思考状態ではなかつた。スライムはただ揺れるだけで、これまで時間をかけて教わつた武術が通じないので。

それも自分が最も自信のある突きが。そして次に自信のあるローキックのような蹴りも。

だから、自暴自棄になり、大技ばかり放つたのである。

(これが……世界の広さ……なのか?)

その時、何十発もの攻撃をして、やつと彼は頭が冷めた。すると、急にスライムに恐怖が、ふつふつと心の奥底から湧き上がつてきた。そのスライムの姿に、飄々とした底が見えない姿に、言いようのない感情を感じたのだ。

始めてであつた。

戦いを楽しいと愉しいと感じたのは何度もある。だが、戦いを怖いと思つたことは無かつた。

スライム、ゲームでは初期に位置する怪物モンスターと聞いたが、実際は全く違う。こんな、こんな、うんともすんとも云わない怪物モンスターだと。自分に初めて恐怖を与えた存在であり、遙か上にいる存在。背を無様に晒しながらも、その名をしかと胸に刻んだ。

そう、彼は逃げ出したのだった。

「うわっ、だつせ。スライムなんかに逃げ出してるぜ、あいつ」

「ブブツ、スライムの力量は1。^{レベル} あいつの力量も1。^{レベル} あいつの命も今日一日」

「まあ、言つたな。ルーキーなんだぜ？ 今日“冒険者”デビューした可愛い可愛いルーキーなんだぜ？ 許したれよ、まあ、身ぐるみは全て剥ぐ、がな」

「ふつ、あんなルーキーから搾り取るとは我らも悪よの」

地上へと続く階段の近くで、逃げ出した氷雨を見ていたのは、酒場でカウンターに最も近い席に居た四人。

強さ中堅より少し下。装備は似たようななめした革で作られた防具に、剣、剣、槍、斧とそれぞれが強いと思う武器を所持していた。

彼等がスライムを雑魚というのはしかたがない。

スライムは打撃系の攻撃は全て無効化するが、剣や槍による斬撃。^{スキル} もしくは魔法や、地に武器を叩きつけるなどして衝撃が出る技を持つていると、^{モンスター} “絶対”に一撃で斃せる怪物だからだ。

そんな迷宮の中でも足元に位置するスライムと一対一で戦つて、勝てなかつた氷雨。そんな彼が雑魚と認定されるのは自然の成り行きであった。

「ブブツ、あいつ先へと進んでいった。こんな時間に無謀だ。無謀だ。無謀だ」

「流石、初心者。オレ達の想像の斜め上を行くぜ」

奥へと進む氷雨を見て、四人の冒険者たちは、また、瞳^{ひとみ}。

今の昼と夜が混じつた黄昏^{モソヌタ}時は、大抵の怪物^{モンスター}が凶暴化する時間帯だ。スライムみたいな怪物^{モンスター}は別だが、昼間や完全な夜間になどと比べると死亡率が高い。

つまり、同じ階級でも強さが別段なほど、違うのだ。

だから、殆どの冒険者はこの時間だけは迷宮^{ダンジョン}に来ない。自らを鍛えたい冒険者や無知な馬鹿な冒険者以外は。

もちろん、氷雨は後者に入る。

四人の冒険者は、まだここが一階層のため、黄昏時でも大丈夫だ。もう少し下に行くと、このパーティーでも、命が危うくなるほどである。

「 さ、ルーキー狩りの始まり始まりだ」

そして、四人の冒険者は、“狩り”慣れた迷宮^{ダンジョン}を歩き出したのだつた。

「 はあはあ……」

氷雨はスライムから命辛々逃げ出したと思っている。

久々の脇目も見ない全速力で走ったため、息は切れていった。体には嫌な疲労感だけが残る。過程がどうであれ、結果自分は逃げ出したのだ。

その負けた後味は 決していいものではない。

(次は……殺す)

彼は広間ではなく、薄暗い狭い通路を歩きながら、密かに決意していた。それは誰にも語られることのない決意だつた。

だが、そんな思いを抱いても、恐怖の後に残つた胸の中の苛立ちは消えない。後ろから探偵のように着いてくる四人の男達にも気づかないほど、心はスライムに対する思いに覆われていた。

そして、何かにこの怒りをぶつけたい、とそんな狂気に彼は包まれている。

グルグル！

そんな今触れれば凶器であろう人間の遠く向こうで、牙を見せ、深く唸つてゐる者がいた。

狼のような怪物モンスターである。

その種族名は ルー。

だが、北の森で見た動物モンスターと比べると、同じ形で合つても大きくなない。体色も黒で、“あれ”ほどの威圧感はない。

その怪物モンスターは黄昏時によつて瞳を赤くし、より凶暴になつてゐた。だから、本来なら、獲物を見つけた時点で一気に駆け寄り飛び掛る筈なのに、このルーは何故か飛び掛らずに、通路の端にいた。野生の第六感か、怪物の勘か、詳しいことは不明だが、ルーは一目で氷雨を危険だと気づいたのだ。

なので、通路の端でそつと息を殺す。

氷雨に殺されないためであつた。

不幸にも氷雨は、壁にある白い花が光つてゐるだけの見えにくく通路のせいか、すぐ横に居たルーなど見えていないようで、すんな

りと横を通り過ぎようとしていた。

ルーは心臓をどぐどくとさせ、丸くなりながら待っている。氷雨がこの場からいなくなるその時を。そんな無限とも思える刹那を、ルーは感じていた。

やがて、氷雨は前だけを見据え、この場から去つていった。

ルーは、その安堵ゆえか、ほっとした一息をついたように見えた。

これがまた、彼が戦いを逃した瞬間であつた。

グルグアツ！

ルーは氷雨の後に来た男達に飛び掛つた。

氷雨モングスターと比べると弱いと思つたのだろう。この迷宮で生まれたばかりの怪物モンスターに、『強さ』を正確に測るような選別眼は備わつていなかつたのだ。

そんなルーは、男達に飛び掛るものの、二人の剣士によつて動きを取り押さえられ、最後に1メートルは軽く超える斧を持った男の技スキルによつて、頭をバキッと割られた。

ルーは生まれて数十分で、命を失つたのであつた。

それは、いくら黄昏時モンスターで怪物が獰猛といえども、たかだか力量レベル1では長年冒険者を行つてゐる彼らの敵ではない。だが、念のため、男はどぎめとして、技スキルを放つた。

その^{スキル}「重斬」。

斧^{スキル}技の一つで、大きな斧の特性である重さと硬さを最も活かした一撃必殺の縦切り。隙も多いが、通常では考えられない程のパワーで斧を振り落とすので、威力は絶大であった。

まさにとつておきの名に恥じない一撃である。

怪物^{モンスター}が彼に怯えて隠れていたことなど知らない男たちは、氷雨が先に行つたことで残つたルーを始末しながら、日々に思いのたけを喋つている。

「うわっ、あいつルーにまで逃げ出してるぜー。」

「普普通^{レベル}、ルーの力量これまた1」

「でも、ちょっと変じゃねえか？ 幼児でも2は持つてるぜ。あんな成長した男が1なんて考えられねえよ」

槍^{レベル}を持っていた男が感じた違和感であつた。
力量^{レベル}が低くすぎる人間。1などありえないのだ。男は力量^{レベル}1の人間など、赤ん坊しかこれまでに見たことがない。
だから、この男は疑問に思つたのだが、

「ふつ、どうせ温室育ちなのだろう。病弱で温室育ちのどこかの貴族の嫡子なら、力量1でもおかしくはないはずだ。そういう噂は、どこかで聞いたことがある。実際に見たのは初めてだがな」

斧を持っていた男に即座に否定された。

これは、貴族風の男に似た意見でもあった。

「いや、そんな貴族の坊ちゃんならこんなところ来ないだろ？」

「普普通々、そうだな」

「そこでだな、オレは考えたんだが、あいつには凄い秘密があるんじゃないえか？ それも特上な秘密が、だ。例えば力量^{レベル}の偽造とか、詐欺だ。これは今、都市伝説であつただろ？」

「ふつ、都市伝説はあくまで都市伝説だ。そんな物に踊らされるなんて、お前もまだまだだな」

「普普通々、力量^{レベル}が偽造が、本当だつた。としても、問題ない。どうせ、あいつはルーすら斃せなかつた。それに武器も持つてない。だったら、オレたちなら斃せる」

「まつ、そうだよな。じゃなきや、あんな出来立てほやほやのスマイムやルー相手に、逃げるわけねえもんなん……」

「それにもし、あいつが貴族の嫡子なら、我々もいい金づるを見つけたと言つことだ」

「だなー」

氷雨を見つからぬよう足音がしないよう追いかけながら、一人の男が思つた疑問は仲間の声によつてすぐに泡となつて消えた。

「そうだそうだ、と彼の力量^{レベル}1という事に納得したのだ。

力量をどれだけ偽造しても、その“もと”が弱ければ偽造の意味がないからである。

もし、その者が三桁になるほど強くて、その強さを目立たぬために隠したいのであれば、不可能とされる力量^{レベル}の贋作もありえる。

だが、彼は弱い。

力量1の怪物すら斃せぬようでは、全てが杞憂だろうと野は思つ

たのであった。

「で、あんなふとしたオレの勘違いは無かつたことにして、ビリで
あいつを嵌めるんだ？ この先にある広間なんか、丁度いいと思つ
ぞ」

「ふつ、そこはちやんと考へておる。あの広間には地下へと続く階
段があつたであらう？ そこを降る直前に仕掛けんんだ」

「普普通、君たち流石。階段を降りよつと油断してゐる時に狙うなん
て外道」

「ふつ、そう褒めるでない」

斧を持っていた男は、自分に酔つていた。
彼が貴族の嫡出子ならぼろ儲けだし、もし一文も持つていなくて
も奴隸として売ればいい。
どつちに転んでも金が稼げる。

そう、この時は、こう楽観してられたのだ。

氷雨は狭い通路を腕をぶらぶらとぶら下げてゆつゝと歩きながら、刺々しい瞳で獲物を探していた。

スライムから逃げ出して以来、怪物の影すら見ていないのだ。それはルーと同じように怪物が彼を見かけると即座に逃げるか、隠れ

るという行動を行っていたからであった。

ゆえか彼の周りは、殺氣に満ち溢れていた。

溢れ出る戦闘衝動を、発散できないためである。

男達も力量^{レベル}1という色眼鏡がなければ、随分前に逃げ出していたであろう。

(戻るか?)

その時、氷雨は今日は宿に戻つて後日スライムに再戦する、という選択肢を思いついた。

だが、それを実行はしない。

まだ金目の物が見つかっていないからだ。

振り返ればここに鬱憤を晴らしに訪れたわけではない。空腹を満たしに、金を稼ぎに来たのだ。

しかし、甘い。

この階にある宝は、既に他の冒険者に掘り尽され全く残っていない。40や50まで行けばまた違つ結果になるだろうが、彼にそんな予備知識はないし、そんな下の階まで行ける仲間も、力もなかつた。

初めての冒険である彼には、何年かけても攻略者が“0”の、この永久の迷宮^{とこしえ}はそれほど厳しいものなのだ。

今、彼がいるこの一階には、既に何千人と人が訪れた。故に、マップの詳細も、出現する怪物^{モンスター}も全ての情報は、冒険者の中に出回っている。

だから、一階を拠点としたら、稼げる金も稼げないのであった。

「はあ……下に行くか」

彼はそんな知識もないのだが、目の前に現れた階段を降りることを即決した。それは、この広間に先に続く道がなく、先へと続く道は下しかないからであった。

そして、階段に向かつて踏み出すると、

「今だつ！――！」

野太い男の声が、部屋中に響く。

四人が、一斉に、片足を階段へと踏み入れた氷雨へ襲い掛かったのだ。

「……！」

この場面で不意討ちされることは氷雨も予想していないく、足を階段のふちに引っ掛けながら、無様に転げるようにして、四つの刃物は避けられた。

だが、床の上に転がる氷雨に、すぐ第一陣がやつてくる。

「死ねつ！」

槍であつた。鋭く、長い槍。幅広大型な三角形の穂先を付けた長槍で、俗に云うパルチザンである。

剣より長い槍が、転がっている彼に突く。

氷雨は近づいてくるそれを、冷静に、刃ではなく柄の部分を上へと殴つて逸らす。

「プツ、次つ！」

第三陣が襲撃する前に彼は起き上がるが、膝立ち状態の彼に今度は剣が薙ぎ払われた。氷雨はそれをバックステップで避け、敵の情報を整理しようとした。

だが、そんな余地は与えてくれなかつた。

今度も剣だつた。

深く踏み込んだ男が、剣を彼の頭上に落とす。また、氷雨は下がつて避けた。

續けざまに別の一人が、剣を振るう。

さらにまた別の一人が斧を振るつた。

しかし、これはただの序章であった。濁流のような勢いで、彼を飲み込む攻撃は、これから始まるのだ。

槍。劍。斧。劍。劍。斧。槍。劍。

まだ、四人の男による猛攻は終わらない。誰もが氷雨に向け、容赦もなしに武器を振るつてきた。

氷雨は精神を削ぎ落としながら、一つ一つ命のやり取りをしていく。瞬きや深呼吸の暇さえ、与えられない。

氷雨の頭には躲すという事柄しかなく、時には丁寧に、時には大胆に、攻撃を一つ一つ後ろへと下がりながら躲していった。

「もつとだつ！」

男達も氷雨と同じように戸惑っていた。初撃で葬る予定だつた氷雨が、まだしぶとく生き残つてゐるからだ。だが、彼が何者かという思考する余裕はない。これで殺さなければ、これで殺さなければ、と攻めても攻めきれない相手に、手をこまねいているのだ。

「ブブツー！」

後ろへ一心不乱に躰していた氷雨は、ついに背を壁についた。そこを狙つていた槍使いが、槍技^{スキル}『疾槍』を放つた。『疾槍』は単なる突きであるが、『重斬』同様リミッターを外した筋力によって行う並外れた速さの攻撃であった。

それはやはり早い。

だが、重い槍であるが故に、祖父のジャブほどのスピードではなくぎりぎり見えたので、氷雨は頭に迫り来る槍を、首を左に傾ける。髪が少し切れた。しかし、皮膚までは切れなかつた。狙いの外れ、勢いのついた槍は壁に当たり、刃が欠けた。氷雨にとっての 絶好な好機だつた。

「なつー！」

氷雨は研ぎ澄まされた感性で、その一瞬の隙を見逃さない。槍を片手で支え、もう一方の片手で関節を折るようにする。

ボキッ！

そして、 極めた。

人の骨を折るように、木で作られた柄を折ったのだ。

「あつあつ……」

槍使いは斬られたのではなく、折られた槍に声すら出ない。武器とは消耗品なので、代えの武器を持つているが、懷に隠した武器を出す時間を与えられなかつた。

氷雨は、一步で相手に近づく。

槍使いの仲間は槍使いを守るよう、先に氷雨を殺そうとする。だが、その前に彼は槍使いの兜が無い顔面を殴つた。

「……」

もう一発顔を殴る。さらに睾丸のある股間に上蹴り。音はなかつたが、ぐにやりとした感触から潰れたな、と氷雨は感じた。

槍使いは くる、と思つた。

それは睾丸を潰された痛みである。数秒後、やはりきた激痛に悶絶した。その痛みは、すぐに全身を走る。やつてきた絶え間の無い痛みの波は、槍使いの戦意を消失していた。

そんな男は股間に手をやつた。

痛みが消えぬと分かつていても、股間に手をやつたまま膝から崩れ落ちた。目を固く縛り、呻き声をあげ男は倒れたままジタバタしていた。

戦えないわけではない。立てないわけではない。

だが、感じたことの無い激痛に、終わらないだろう激痛に、槍使いの戦意は消失していた。

「いつそのこと死にたい、そう思つてしまつよつた痛みだつた。

そんな氷雨は、状況は以前として不明だが、先に仕掛けられるのに、殺さないや手加減するなどといった感情はない。

やられたらやり返す、との心情のもと、攻撃には手を緩まなかつたのである。

そういうた覚悟が、弱点を的確に狙つたのだつた。

「あ……あ……」

そして、槍使いの仲間の三人は、仲間を立つたまま見ていた。男なら誰でも感じたことのある他のどれとも違つ云い様のない痛みに、耐え抜いている槍使い。

その姿を見て、仲間の自分の股間も押さえたくなつた。

「うおおおお——!..!..!..!

次に吼えた仲間が居た。

あの痛みを見た後で、自分を奮い立たせるために、急所を的確に狙う敵を斃すために。

先刻の不安は、杞憂だったのではない。

敵は強大だと。

だから、剣を強く握つた。

だから、大地を強く踏みしめた。

そして、氷雨へと距離を詰め、剣技^{スキル}『連剣』を行つた。『連剣』とは、人外の速さで幾つもの剣による閃光を起こす技だ。

何発も。何発も。何発も。

だが、高威力しかも連續技であるこの技^{スキル}には弱点があつた。発動

すれば終わるまで、その場から動けないのだ。

剣のリーチは拳に比べると長いが、槍に比べると短い。

氷雨はその剣の距離を冷静に見極め、下がった。胸や腹など、『連剣』によつて体の正面に傷が数箇所入つたが、深くは無かつた。
そこから先は言うまでもない。

男は『技』^{スキル}の効果で、その場で剣を振り回しただけであつた。『技』^{スキル}とは、効果的な場面で使える予想外の強さを發揮するが、一步間違えると不利になる。

この『剣技』^{スキル}『連剣』もそうだ。『連剣』とは他の『技』よりも強力だが、一旦放つと途中で止められないというデメリットをする。
そして、男の攻撃が終わつた。同時に動きもとまる。

顔が青白くなり、無呼吸運動を続けたが故の、酸欠だつた。
大きな深呼吸をしたかった。

だが、それも叶わない。

氷雨は動きが止まつた男を待つてたのか、がら空きの皿に人差指で一突き。

そのまま 指を穿り出した。

眼球が飛んだ。地面に転がる。眼があつた眼底からは、血が間欠泉のように出る。

剣使いの男は痛みよりも、片方の光が無くなつた事に驚いた。
すぐにその原因が、もう片方の目に映る。

「ああああ————！」

絶叫した。

だが、この男の凄いところは、片目が無くなつても氷雨に反撃し

た事であった。

技は使わない。いや、使えない。もう一つの『連剣』のデメリットに、使用すれば体の負担を減らすため、一定時間は他の技は使えないものである。

だから、男はすぐ傍にいた氷雨に袈裟切りをした。

しかし、氷雨の攻撃とは速さが違った。

拳と剣。超近距離であれば、拳のほうがその速さゆえに有利になる。

拳はフックの要領で、鎧の隙間をぬつて男の脇腹、肝臓の部分に刺さる。

ボキッ！

あばら骨が何本か折れて、体がくの字に折れ曲がる。その衝撃ゆえか、剣も手から離れて地面に落とした。

剣使いの男は、人間による内臓を的確に狙つた攻撃は初めてのようで、意識を簡単に手放した。

「くそったれ！」

そんな氷雨に背後から、斧を振り落とす者がいた。

それは『重斬』。
ルーを斬した技と、同じであった。

結果からいふと氷雨はそれを食らつた。避けるには時間が余りにも足りないからであった。

「ぐつー。」

だが、彼も負けてはいない。

斧自体は体に命中したが、斧使いの方へ体を動かしたため、刃ではなく金属部分の柄がもろに右肩にあたる。

右肩は『重斬』の威力によって外れたが、大した怪我ではない。

次にくるんとターンして、氷雨は筋骨隆々の斧使いの男の正面に立つた。

そして、左手の手刀を斧使いの首に。男も斧で反撃しようとするが、その重さゆえに取り回しにくい。

両手で振り上げてもう一度、斧を落とす前に、首にもう一度右ハイキック。首は、太いゆえかまだ折れてなかつた。

男は斧で反撃するのを諦めたのか、武器を手放した。

そして、斧使いは幹のように太い腕で氷雨を殴ろうとする。

これが、斧使いの間違いであつた。この体格の違いからの筋力差に、斧使いは素手でも勝てると思ったのだろう。

だが、徒手空拳がずぶの素人である斧使いと、素手のみを長期に渡り鍛錬してきた氷雨。

戦力差は誰が見ても歴然であつた。それに、斧使いがつけている筋肉は斧を使うための筋肉であつて、殴る筋肉ではない。

氷雨は殴ろうとする男の左腕を逸らすように取る。そして、背負うように投げ、地面に叩きつけた。受身を知らない男は、背中を強打する。

そして、氷雨はそのまま首を取り、両腕で頭部を挟み込み、捻るように回して、極めた。

ピコーン、力量^{ケベル}が2になりました。

その声は、氷雨の左手からした。斧使いが死んだことによる力量アップだった。

だが、氷雨は力量^{レベル}アップに関心を向けない。彼が興味あるのは、
“ほどよい”殺意であるからだ。

「あつ……あつ……」

地面に横たわる二人。

そして、未だ立っていて、氷雨が見つめてるのは自分。
未来は楽に考えられる。

彼は、剣を持っている自分の狙っているのだ。

いくら力量^{レベル}がたった今、2になつた彼でも、脅威だという事実に
変わりはしない。逃げることも出来ないだろう。鎧を着ている剣使
いとマントのみを着た氷雨。

どちらのほうがスピードは早いのかは、猿でも分かつた。

「……ああああ――――――!――!――!――!――!――!――!――!

男の慟哭は、部屋中に木靈する。

このパーティで一番強かつた斧使いが負けたのだ。そんな相手
に、パーティで一番弱い自分が勝てるわけなど無い。

だが、勝てぬと分かってても、抵抗するしか道は無い。それで奇
跡が起きなければ自分は負けるのだ。

剣使いの男は、『飛斬』を田隠しに、氷雨へと近づく。

だが、既に『飛斬』を田にしたことがあつた氷雨はそれを難なく
避け、近くに落ちていた斧を剣使いに投げる。

「えつ！」

男は迫つてくる大きな斧に剣で防ごうとするが、パキッと剣が折れた。斧は柄の部分が腹に当たったので即死は免れたが、すぐ前に氷雨がいた。

ブシュッ！

そして、細い男の首に、氷雨の貫き手が突き刺さっていたのだった。

「つー！」

氷雨は貫き手をした左手を、首から引き抜く。肌についた血を飛ばすように腕を一、二回振つてからマントで血を完全に拭う。

そして、死屍累々と横たわる死体と、呻き声をまだあげている槍使い。それに片目を失つたまま氣絶している剣使いなどの惨劇を見て、一言。

「ふう……やりすぎたか？」

氷雨は、軽く言いのけたのだ。

あの貴族風の男がいた広場にて、人を一人も殺しているので、もう人殺しに慣れたのだろう。まるで動物が当たり前に呼吸をするように、氷雨も当たり前のように人を殺したのだ。

だが、ただ一つ。勿体無かつた、と彼は思つていた。

彼は不意討ちが嫌いで、正々堂々が好きなのだ。不意討ちはしてもされても、“戦い”の興奮が悪い意味で存分に味わえない。

その点、正々堂々は体の芯まで“戦い”を味わえるのだ。

本日は、“戦い”を十一分に堪能とまではいかないが、ある程度の充足感は手に入れた。

これ以上の高望みをしても衝動は際限なく湧くだけ、と彼は考え、今は早く帰りたかった。そして、当初の予定通り飯を腹一杯食べたかったのだ。

(さて、全部盗るか)

幸い金の当てはあった。

それは、死人に口なしの如く、一人ずつ装備や金になりそうな物を剥ぎ取つていったのだ。そこに遠慮の一文字など無く、ただ黙々と奪い取つていった。

(ふう、この程度か?)

まず貨幣を手に入れ、武器も手に入れた。その他装飾品など、金になりそうで軽い物は全て奪う。しかし、防具だけは脱がすのが大変なので諦めた。

氷雨は両手に抱えきらないほどの戦利品を手に帰ろうとした時、ふと 妙な空気を感じた。そして、周りを丁寧に見回した。

グルルル！

その胸騒ぎは、間違つていなかつた。

ルーがいたのだ。それも數十匹も。

狼のような怪物であるルーは、やはり鼻が発達していた。だから、氷雨が殺した一人の血に誘われてここまできたのだろう。

「へえー、俺と、戦^やるのか？」

氷雨を丸く囲んでいる數十匹のルーは、例外なく目が赤かった。黄昏時の影響は、まだ切れてないのだろう。そんな、ルーの数による威圧感は間違いなく氷雨を刺激し、戦利品を全て地面に置くと、彼もルーと同じように殺氣を出した。

大群のルーは、少し氷雨から退く。

あの生まれたばかりのルーと同じように、このルーたちも類稀な嗅覚で匂いだけでなく強さも、本能的に嗅ぎ分けるのだ。

「逃げたきや逃げろよ。今日の俺は機嫌がいいから見逃してやるぞ？」

氷雨はそう挑発してからルーを一警し、さつさと戦利品を拾い上げた。

朝から何も食べていない空腹の彼にとって、満腹という未来がとても輝かしく見えたのだろう。戦いという欲求には勝ても、食欲という欲求には勝てない氷雨であった。

グアツ！

ルー達も氷雨の言葉の意味は分からなかつたが、言葉の真意は分かる。

大勢の怪物は氷雨から四人の冒険者へと視線を変え、その肉へと喰らいついた。足に、腕に、内臓に、思い思いの場所へと一緒に喰らう。

辛うじて生き残っていた冒険者は、大量のルーによる体を引き裂かれる苦痛に目覚めて叫びだす。だが、黄昏時のため助けてくれるような人もおらず、そのまま死んでいくのだった。

これが、迷宮のメカニズムだった。

何かが死ねば必ずハイエナのように怪物が現れ、死体を骨だけにする。

服や鎧は、見つけた冒険者が拾うので、結果的になくなる。そして残った骨でさえも、迷宮という生き物に喰われてなくなるのだ。

なので、何百人と死んでいるとされるこの迷宮には、骨一つ残らない。常に綺麗であった。

だが、それは、絶えず行われている迷宮の浄化作用のおかげなのだった。

夜。

氷雨は町に戻ると、昨日泊まった宿屋に向かった。食事の前に武器等をどこかで売り捌こうとも思つたが、既に空は薄暗くなつていたのと空腹の為、諦めた。

なるべく早く腹一杯食べたかったのである。

この宿屋の食堂のシステムとして、夕食込みの場合の食事はパンとスープだけだが、追加料金を払うと肉や野菜などが食べられる。パンとスープの種類は毎日変わるので飽きることはなが、物足りない感じる者だけ追加メニューを頼む。

だが、そんな者は極僅かであった。

この宿に泊まる大半が、並程度かそれ以下の冒険者である。

冒険者の資本とは命だ。

彼らは死にたくないため、装備や薬草などに一番金をかける。少しでも高価で丈夫な装備を、と冒険者はいつも保険をかけるのだ。なので、質素な食事だけで満足し、金のかかる豪華な食事など一番後回しにする。一時の幸福感のために命を疎かにするなど、冒険者の間では考えられないのだ。

中には追加メニューを頼む者もいるが、その者達は皆冒険者の中でも上級者である。高い装備に身を包み、永久の迷宮の^{ダンジョン}50階以上を、軽く踏破する強者しか食べることはまずないのだった。

「これで買えるだけの肉をくれ」

氷雨はぼろい灰色のマントのまま、食堂のキッチンの人間に銀貨を3枚出した。

キッチンにいた料理人の一人は、こんな貧相な格好の男が追加メニューを頼むなんて、と驚いたが客の内情に口を挟むほど愚かではない。

氷雨の注文通り分の肉の塊を焼いてから、塩だけで味付けを皿の上に置いた。パンとスープも一緒に。

彼は空いていた椅子に座ると、即座にがつつき始めた。

他の客が居れば、力量^{レベル}が低いのに追加メニューを頼んでいる彼に目を付けるだらうが、黄昏時が終わつたこの時間。もう一度日々の路銀を稼ぎに、迷宮へと潜る冒険者が多いため、現在この宿屋の食堂に彼以外の客は居なかつた。

氷雨は肉を食べ、パンを口に入れながら、スープで流し込む。味はやはり薄かつたが、量だけで云えば昨日より遙かにいい。

食事の時間は數十分で終わる。

その後、今日の戦利品をすべて部屋に置くと、彼は外に出て行った。

外に出ると、雲ひとつない黒い頭上には、煌びやかな星が無数に輝いていた。例えば、存在感のある一等星や二等星のような大きな星や、天の川のような肩星が集まっている集団。白く光る月や様々なかたちに見える星など、それは街灯がないこの世界ならではの、素晴らしい景観だった。

それらの星達は、一晩ではとうてい語りきれないであろう“物語”が作れそうであるかつて、古代の人々が星座でいくつもの“物語”を作ったように、神話がここから生まれたようだ。無限に想像力が湧いた。

そんな雄大な景色の下で、氷雨は地面に両手をつき、腕立てを始めた。両手で普通の腕立てを五十回。指立てを五十回。その後親指だけの腕立てを五十回し、氷雨は立つて走り出した。汗はかいていない。

軽く流すだけの運動であるからだ。

日々の鍛錬を怠れば実力も落ちる。

武術に関してだけは、そんな祖父の教えを律儀に守っている氷雨だった。

適当な距離を走り終えると、今度は空き地のような場所を見つけ、マントを脱いだ。

そして一個ずつゆっくりと技の確認をしていく。

突き、手刀、貫き手、上段蹴り、中段蹴り、下段蹴りなど、どの技も丁寧で綺麗な型である。技の^{スキル}ような筋力アシストがある雑な技ではなく、精巧に作られた日本刀のような鋭い美しさであった。

型が終わると、今度は股割りをする。その身体は足が定規のように真っ直くなっているので、体操選手のように柔らかつた。次に、前屈など様々な関節のストレッチを始めた。

武術家にとって、身体の柔軟性は筋力と同じくらい大切である。特に蹴り技は、身体の柔軟性がないと行うことすら出来ない。

「帰つて寝よ」

そんな一通りの筋トレと柔軟の訓練を行つてから、氷雨は宿へと帰つたのだった。また、明日の冒険のために体を休めよう。

彼の現在の装備、古びた灰色のマント。持ち物、売却予定の装飾品や武器多数。

所持金、4670ギル。

今日の氷雨の怪物討伐数0。^{モンスター}レベル2。

第十一話 初めての冒険（後書き）

試験的にですが、迷宮と迷宮？と鍛錬を一つに纏めてみました
読みやすさはどうだつたでしょうか？
もしこれについて何かあれば、””感想、””評価などをいただけると、
とても嬉しいです。よろしくお願ひいたします。

第十一話 怪物狩り

氷雨は一日の休息をとり、迷宮へと来ていた。

彼が今居るのは一階。景色は相変わらずの石壁で、照明は白い花である。

まだ怪物モンスターは一匹も殺していないが、殺す為の対策はきちんと考えているので、“どんな怪物モンスター”でも斃すことが出来ると、彼は敵と遭遇するのを嬉々と待っていた。

そんな彼の休息の理由は 怪我である。連日に及ぶ連戦で、体にはがたがきていた。貴族風の男の護衛を斃すときは両手首を外し、左肩に大きな損傷を。次の日に戦った四人の冒険者には右肩を外された。だけかと思いきや、次の日にその怪我の確認をするとうつ血していた。

体に負つた傷はこれだけではなく、細かい切り傷などを数えれば数十にのぼる。どれもこれも戦えないほどの傷ではないが、無視できるほどの怪我でもない。焦らずとも先があると彼は考えて、二日間は休息と情報収集に力を入れたのだ。

グルルル！

迷宮ダンジョンを探索していると、見慣れた怪物モンスターの姿があつた。

ルーだ。相変わらず狼に、よく似ている。

この階層ではルーがよく出ると、ギルドでの調べは事前にについてある。ギルドでは情報提供があつた怪物モンスターの生態や弱点などは、まとめて保管しているのだ。

それらが載せられた写本を貰うのに当然金は必要となるが、氷雨

は必要経費と割り切つて十階までの怪物資料は全て買つた。

中には喉から手が出るほど欲しかつたスライムの詳細も載つてあつたので、 本日の目標はスライム討伐と、勝手に心の中で決めていたのである。

シユツ！

氷雨は本来なら狩らない格下の敵相手に、全力の蹴りをした。鋭い蹴りは飛び掛つてきたルーの頬にぴったりのタイミングである。ルーはその威力の高さのあまり、遠くの地面に転がる。

彼は手刀で、その動きが止まつたルーの首を一閃した。

そして ボキッ、ルーの首が折れたのであつた。

(はあ、弱^{ます}い。でも、リハビリには丁度いいな)

氷雨は嘆息を一回。

彼の性分として、弱い者虐めは基本嫌いだ。強い者と戦い勝つことが彼の至福の時間なので、不味い肉を大量に食べるような行為である弱者を斃すことには嫌悪感すら感じる。

だが、一日の間体が疼くばかりだつたのと、久々の戦いで勝負勘を取り戻そうと思っていたので、今回は特別にルーを殺していくのだ。

それと怪物を殺すと金ができる、という理由もある。

迷宮で生まれ、迷宮で死んでいった怪物は黒い霧のような瘴氣となつて霧散し、迷宮の壁に吸收される。

その時に残つた色々な色彩を放つ石、すなわち“結晶石”がこの大陸の大切な資材となり、そこそこの値段で売れるのだ。

氷雨はこれをお金が入つていた巾着に入れながら、拾うのが少し

窮屈に感じていた。“結晶石”はお金となるので捨て残はないが、これを腰に持ちながら戦うのは少し面倒だと思ったのである。

「よつと」

キャウンキャウン！

氷雨は細い通路の前方を塞いでいるルーを蹴りで飛ばす。彼は床に倒れたそれの頭を、自分の体重のみで踏み潰すと、それは呆気なく絶命した。

「はあ……」

キャウンキャウン！

氷雨は後ろから飛び掛ってきた二匹のルーの内、一匹は頭に体を一回転させた踵落として、二匹の頭はただの肘撃ちで、三匹目は頭を掴み膝に打ち付けるように蹴った。

どれも頭がぱんっと弾け、“結晶石”だけが残った。

「……」

キャウンキャウン！

氷雨は走った勢いに任せて、また狭い道を防いでるルーに飛び蹴りする。彼の攻撃は胴体に当たったが、そのまま首を両手で持つて、捻るように回し、極めた。

ちなみに、この時の彼の目は笑っていない。

グルルル！

彼の進行方向に、またルーが現れた。

当然、彼の細道を塞いでおり、先程のルーを斃してからまだ一分と経っていない。

ルーの遭遇率はこの階にいる他の怪物モンスターに比べてそう高くはないのに、五分の間に六匹とは凄まじい確立であった。

「俺に恨みでもあんのか！！！」

氷雨は怒鳴りながらルーに近寄り、顎にアッパーをする。怒りに染まつた彼の拳は岩石のように硬く、弾丸のように早かつた。ルーは一メートル程しかない天井に激突し、重力によって地面にも叩きつけられ、死亡した。

ピコーン、力量レベルが3になりました。

また、左腕から音が鳴った。氷雨は殺した経験のない怪物モンスターばかりを討伐した事によつて、経験値が少しだが多く入つたみたいだ。いわゆる“初心者”だけの特権であろう。

だが、彼はその機械の音を雑音と称し、関心すら向けなかつた。力量レベルが上がつたら強くなるとギルドの人は言つてたが、“機械なんかで人の強さは決められない”と思っている彼にとつては、そんなのはたわごとでしかないのだ。

それからの氷雨は、何十匹のルーを見つけても無視するか、一撃で葬つて先を進んだ。ルーばかり鉢合させしていた彼には、弱いはずのルーがとても恐ろしく感じたみたいだ。

もう、ルーの顔すら見たくないらしい。

それは彼がギルドで買った冊子の中身の内、怪物の弱点は食い入るよう見ていたが、それ以外はさっぱりで食指さえ動かなかつた。なので、彼は各怪物モンスターがどの階によく出没し、どの階では遭遇にくいなどを知らない彼が、原因なのであつた。

一階

このエリアは水分が抜けきつた土の壁で出来ていた。地面はさらさらした砂で、学校のグラウンドとよく似ている。

階段から登つてすぐは広い部屋のようで、オレンジ色に光つている花も壁ではなく天井にあつた。

キシャシャシャ！

そんな大部屋で、やつと望んでいたルー以外の怪物モンスターと遭遇とした。シユピンネである。体長1メートルくらいの大きさで、全般的に黒く、クモにそっくりであった。いや、間違いなくハ本足のクモだつた。地球上では考えられな大きなクモ。こんなのは、誰が見ても気持ちわるく思うだろうが

「ははっ！」

彼だけは違つた。

本日最初のルー以外の怪物モンスターに喜んでいた。

しかし、この光景を少し離れた場所で見ていた冒険者達は、不人気怪物モンスター堂々の第二位を飾るシユピンネを見て笑つていた彼を、変人だと思っていたが。

シユピングネの人気がない理由は簡単だ。

クモの中でも毒の持つていらない種類で、討伐するのも比較的簡単で、体長も他の怪物モンスターに比べれば大きくはない。

だが、それでも人気がないのは、シユピングネの独特的な性質にある。シユピングネの体液は、人になんの影響もないが、金属で鍛えられた武器を鋸ぎやすくなる。いくら消耗品であっても、例えば十回使える剣を一回ぐらいしか使わないのは勿体無い。とくに浪費家の冒険者にとつては、シユピングネを殺すだけで次の日の飯が食べれない、と云うほど問題である。

つまり、剣の寿命を犠牲にしてまで殺すような存在ではない、と思われる怪物モンスターであった。

キシャ シヤ シヤ！

シユピングネが氷雨に襲い掛かった。彼はシユピングネが現れた事に感動していたので、対応が少し遅れる。その体当たりが“もう”に体に当たった。

氷雨は一メートルぐらい飛び、床に転がつた。

「えつー!?

「冗談きついぜ、兄ちやん!」

どんな者でも、この階のシユピングネ程度なら一メートルも飛べばいいほう。いや、殆どの冒険者はシユピングネ程度の攻撃には躱すか防ぐかの対処をする。まず、攻撃があたらないのだ。
だが、氷雨はあたつた

「意外と遅せな」

かのように見えていただけだったが。

彼はシユピングネの攻撃を、紙一重で顔に直撃する寸前に、後ろに飛んで躲していのだ。その際、久しぶりにこんなスウェーに似た躰しかたをしたので、すっかり足の加減を忘れていた。だから、後ろに飛びすぎたのである。

氷雨は立ち上るとすぐにシユピングネに近づき、柔らかい足の関節の付け根を狙つて、手刀で一振り。その後、シユピングネは七本の足で旋回し、氷雨に噛み付こうと体を浮かせたので、体の下に潜り込み甲殻の間を貫き手で突いた。

キシャ——————！

だが、皮膚が固いゆえに、氷雨の貫き手は刺さらなかつた。

そればかりか、シユピングネは反撃として氷雨を押しつぶそうとする。おそらくシユピングネの体重は百キロを超えているだろう。氷雨は後ろに飛んでのしかかりをなんとか回避するが、シユピングネのほうが一枚上手だった。

立ち上がる時間も無い彼へ、透明の糸を吐いたのだ。さらに粘着性も強い糸を。

氷雨は左手を前に出し、糸をもろに食いつ。幸いにも、肌に付着すると硬くなる性質の糸が巻きついたのは左腕だけだったので、犠牲はそれだけで済んだ。

だが、左手の手首から先は手を軽く握った状態で、固まつて完全に動かなくなる。

(開けない……)

氷雨はシュピンネの突進を躊躇しながら、自身の左手を開こうとしていた。閉じようともする。

だが、皮膚に絡まった途端に硬くなつた糸はとれない。右手で糸を触つても氷のようにつるつると滑る。

これが全身だつたと思うと、氷雨は身震いした。おそらく全身に絡まるとい、体が全く動けずシュピンネの養分にされていた、という予想が簡単についたからだ。

彼は試しに反撃してみた。相手の弱点は頭だ。だから頭を執拗に狙つた。右手で、足で。

しかし、あたらない。クモは意外と足が速いからであつた。そしてその特性も、クモをモ_{モンスター}デルとした怪物のシュピンネにもよく活きてゐる。

剣や槍なら多少のリスクを侵せば、簡単に勝てる怪物なのだろう。そうギルドで貰つた冊子にも書いてあつた。だが、氷雨は素手で装備も紙程度しかない。一撃でも喰らえれば、いくら力量_{レベル}2のシュピ_ンネでも大怪我に繋がる。

下手な失敗は“死”に繋がる。

戦いは好きだが、勝つてこそその世界だ。負ければ何も残らない。

氷雨はそれをよく“理解”していた為、無闇な行動に出ない。

(で、どうする？　逃げるか？)

氷雨の攻撃の大半は分厚い鎧に守られて通じないし、右手一本では出来ることが限られる。足技は隙が多く、関節技は人ではないの

でまず通じないだろ？

仲間がいれば、と云ひ想像もするが、瞬時に自分には合わないだろ？と蹴った。

仲間がいらないこそその“体術”なのだ。あらゆる状況で、あらゆる攻撃が出来る。どの場面でも攻撃ができる、反撃ができる。その武器を持たないと就得られる圧倒的な火力こそが、“体術”なのである。はまれば強い、それが体術の本質だと彼は教えられた。

けれども、こんな美談を語つたところで、絶体絶命なのに変わりはない。

予想外の苦境に冷や汗が出た彼は、酷く思い悩み、自分の頬を右手で全力で殴つた。“逃げる”という考えが、少しでも頭に浮かんだからだ。

ここで逃げたらスライムの時の屈辱をもう一度味わうことになる。それだけはなんとかしても避けたかった。

だが、この状況を打破できるほどの“圧倒的な力”は持ち合わせていないし、“最良の作戦”を思いつくほどの頭脳もない。

「あの冒険者弱ええええーーーー！」

「たかだかシュピンネに苦戦してるとばーー！」

「といふか、糸を喰らひ時点でもう駄だなー！」

ギヤラリーは氷雨が悪戦苦闘しているのを見て、ここに来るような人間ではないと、十人十色の嘲笑した。

氷雨はまだ思い悩んで、

(俺も老いたな。、また 逃げるという屈辱を選択肢の中に入れ
るなんて)

いなかつた。

彼はそんなブーリングなぞ耳にも入れず、すっきりとした顔付きとなっていた。簡単な解決方法に気がつき、これまで思いつめるほど考えた自分が馬鹿らしくなったのだ。

(集中しろ！ 力を抜け。一瞬に全てを！)

そして、次の瞬間予想外の行動に出た。彼はシュピングとの距離をつめ、糸で固まつた拳で大きく振りかぶり

ドゴン！！

「はっ！？」

「えっ！？」

頭へ振り落とした。

シュピングネは鈍器で殴られたような衝撃が奔る。ギャラリーは、想定外の彼の行動に情けない声が出た。

(まだだ！！)

キシャー！？

氷雨の攻撃は一撃だけではない。

二撃、三撃、と相手が噛み付こうとしても、彼は無視して左手だけで、殴り続けた。

左手は固くなっている。ならば傷つかない筈だ、と彼は酷く簡潔に考えたのだ。

その間に偶然激突したシユピンネの牙は、自分の糸の固さにやられて折れていた。

キシャシャシャ……シャシャシャ……シャ……

幾つも幾つも、殴る。そのパンチは突きだけではない。アッシュやフックなど、様々な技術を臨機応変に駆使し、シユピンネの弱点の一つである頭を集中放火した。

やがて、瘴気となつて姿が消えるまで、糸というグローブのついた左手一本で戦い抜いたのだった。

周りのギャラリーは、シユピンネが死んだことによつて糸を消えた氷雨の姿を呆然と見ていた。

まさか左手が固まつた逆境を、チャンスだと考えたなんて。拘束具を武器と捉えるなんて。これなら武器を消費しなくて済む。と、観客達は新たなシユピンネの攻略方法に、心を躍らせた。

だが、やはり武器を消費したとしても、武器を持たないのは正氣の沙汰ではないな、と記憶の中だけに留めたのだった。

(はあ、ジジイの遺言どおりだぜ)

俺は弱い。

氷雨は予想外の逆転劇を、冒険者にぱちぱちと拍手で賛美を送られたからといって、今回の失態を帳消しにするつもりはない。勝てたはずの敵に苦戦する。それを“弱い”からだと彼は考えた

からだ。

スライムだつてそうだ。あれだつて“勝てた”のに、臆病風に吹かれて結果 逃げた。“勝てる敵”に“逃げる”のは自分が弱いからなのだ。

これからのはもつと辛く強い敵が現れる。その度に逃げていれば、逃げ癖がつき、自分は今よりもつと弱くなる。

それだけは避けたかった。

弱くなりたくなければ逃げなればいい。強くなりたければ目の前の敵を全て斃せばいい。

そんな単純な考えに辿り着いたので、彼はすつきりしていたのだ。

(誰にも絶対言えねえ……)

だが、もし、祖父にこの事を知られたら、と彼は次の階を目指しながら顔をしかめた。それ程、自分の先程の痴態が知られるのが嫌だつたみたいだ。

氷雨はこの時逃げ腰を改善した結果、 また強くなつたりしい。

第十一話 怪物狩り（後書き）

今回は今までの書き方に戻しました。
もし「」意見や要望があると、気軽に「」感想、「」評価などをしてください。
れい。よろしくお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0765y/>

戦人の迷宮探索（改訂版）

2011年11月4日18時36分発行